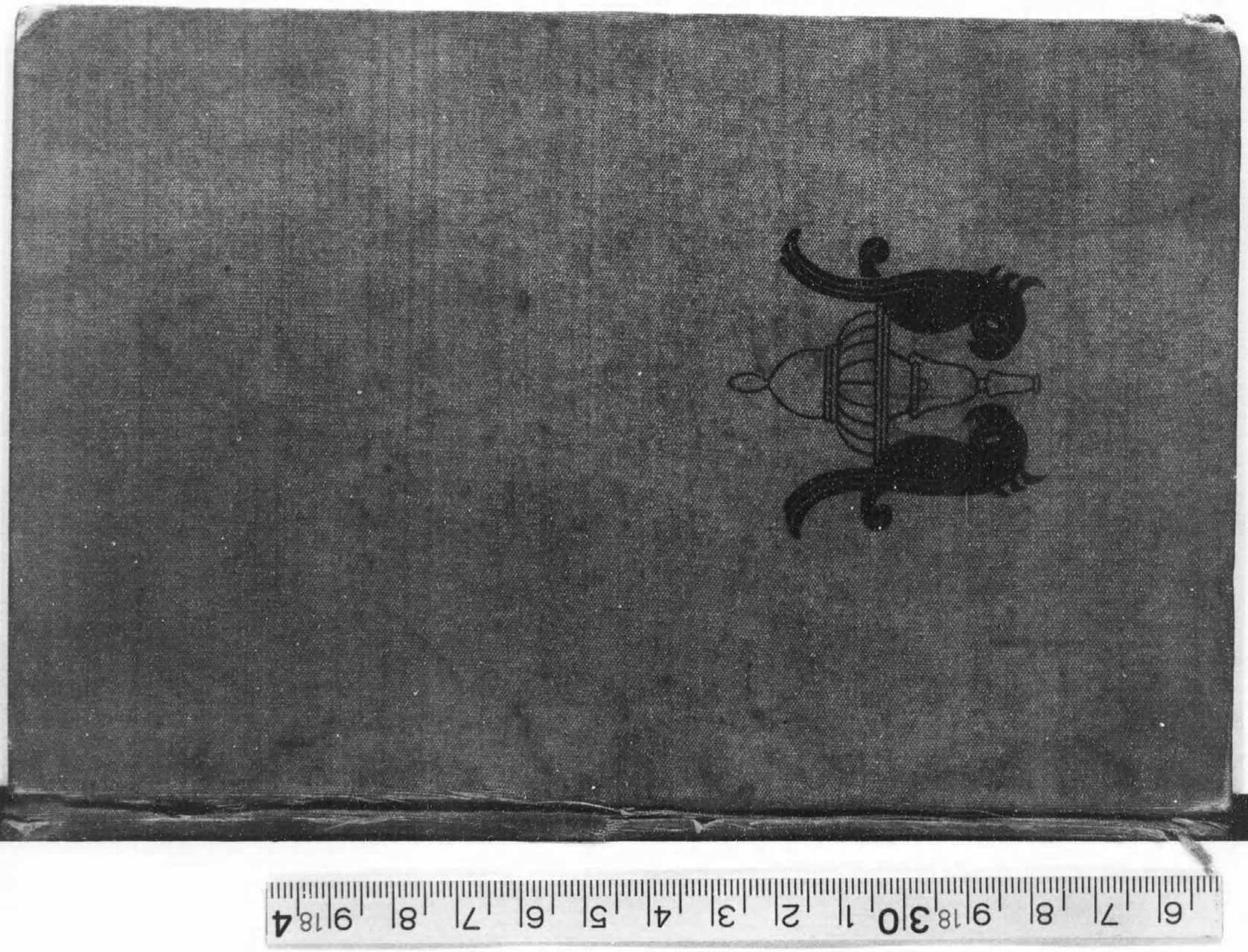

故

特216
637

交涉
應對

座談術

大日本雄辯會講談社編

序

東京の成城小學校では、曩に、入學當初の兒童が、約四千の語彙を有して居るといふ、驚くべき事實を發表して居ります。

どうして、そんなに澤山の言語が、イロハのイの字も知らない兒童によりて收得されたかといふと、「それは全く兒童が各自の自由な言語生活の世界から、殆んど無秩序に、任意に、且つ自然に收得し來つたもので、その大部分は、いはゆる『小耳にはさんだ』もので、兒童自らの必要に應じた自然の收得に外ならぬ」と斷じて居ります。同時にそれは、人間は、生れながらにして社交的の動物であるといふ事を證據だてる、最も有力な事實だと思ふのであります。

「話す」「語る」は、意志表示の最捷徑であつて、これなくして人間は、一日も生存し得ないのであります。獨白形式の演說や講演も「話す」事であり、「語る」事であるには相違ありませんが、日常生活に於ける意志表示の最も簡單にして重要なる役目は、複白形式の座談によつて果され

る場合が多いのであります。

にも拘らず世間では、獨白形式の演說、講演等については、相當苦心もし、研究もして居るやうですが、複白形式の座談については、一向無頓着であり、無反省であるのは一たいどうしたわけでせうか。

曰く雄辯學、曰く雄辯の研究、曰く何、曰く何、雄辯に關する著書だけでも、恐らく數百千種の多數に上る事と信じますが、座談に關する專門の著述に、これぞといふ眼ぼしい著書は今日まで殆んど見當りません。

私は常にこれを遺憾として居りましたが、幸ひにして今回、大日本雄辯會講談社編纂のもとに「交渉應對座談術」が大成せられ、吾々年來の渴望の一半が充された事は、一般社交界の爲めに、座談に志す人々のために慶賀に堪へざる次第であります。一言を序して本書の發梓を祝し、編纂者に敬意を表する所以であります。

安倍季雄

序

愛は語るによつて濃かに、憎みは默すによつて深し。對坐して相語らずんば意思疏通の機なく感情融和の時なきも、一たび沈默を破つて、相談じ、相語れば釋然として互に理解し、互に融和す、蓋し談話は社會結合の根蔕にして、人類生存の要具。これあつて人と人と相結び、これあつて世は次ぎ〳〵へと進み行くのであるが、若し其の用途を誤れば禍亂忽ち起り、乖離たちどころに生ず、といふ危險物であるから之れが用途には常に深甚の注意を拂はねばならぬ。一回の對談に人を心服せしむることもあれば、一語の行違ひに取り返しのつかぬ紛糾を招くこともある。口は禍の門、舌は禍の根として、默つて居つては、世と交ることが出來ず、世と交るには此危險物を取扱はねばならぬ。そこに座談術の必要はあるので、其の呼吸を呑み込むと呑み込まぬとは、世渡りの上の成敗利鈍の分るゝ所、理を盡くし、情を究め、事を擧げ、例を示して其の祕術を公開したのが本書である。

從來雄辯に關する多くの著書はあるが、皆演說や講話の如き獨白の場合の理論方法を主として、座談の如き複白の場合には及んで居らぬ、時に討論の如き理論的闘爭に關する公的複白を說いたものはあるが、對坐相語る私的談話に應用し得るものではない。公的討論の判斷者は第三者であつて對手ではなく、其の判斷も論理を中心として感情の混入を許さぬが、私的談話たる諸否の判斷者は第三者にあらずして、直に其の對手であり、其の諸否の標準は單なる論理にあらずして複雜なる感情の混和して作り上げられたる其の人の性格であり、氣分である。演說のやうな獨白の場合ならば相手構はずに腹案のまゝ喋り通し得るのであるが、座談となれば、さうは行かず、常に其の對手は面前にあつて、これと應酬し、其の出やうによつては、千變萬化して行かねばならぬのであるから、全く以て腹案も立てられず、虛心坦懷、直に人格と人格との接觸を以て話を進めて行かねばならぬ。それも用談だけが座談の全部であるならば、どうか、かうか用事を辨ずれば、それで濟むのであるが、社交の主要部を占め、一言隻句に其の人の性格の片鱗を窺ひ得るものに、一見無用に似たる閑談がある。對者を飽かさぬ閑談の呼吸も亦處世上呑み込み置かねば

ならぬ必要事である。

演說や講話の如き獨白の雄辯術も必要ではあるが、人間生活の全體を通じて、此獨白と座談の如き複白と、何れが多きかといへばいふまでもなく、此複白の場合であり、人によつては演說講話の如き獨白の必要のない人もあるが、座談の必要のない人はない。否、座談なくしては人は一日も社會的生存が出來ないのである。雄辯滔々、壇上に獅子吼する人も、此習得なきがために座談となると猫の如くに萎縮する人もあり、討論となると、口角泡を飛ばして對者を說服せずんば止まざる人も、座談となると此研究なきが爲めに、一笑、直に、他を心服せしむるに及ばざること遠きものがある。由來、日本人は封建的因襲に囚はれ、相識る者や血族關係の人に對しては親密なる談話を交換するも、一般人に對しては殊更に沈默を守りて意思の疏通を妨げ、感情融和の機を逸し、社會人としての現代生活に缺くる所あるを免れない。現代思想の紛糾、世相の攪亂も、多くは相語るの機會なくして反目增長し、乖離擴大するもの與つて大なるを看過することは出來ない。多年の葛藤を一夕の談笑

に決し、旬日の反目を一瞬の會見に解く、相互の理解は座談にあらずして成るの機會なく、明るく正しき共同社會の生活も、座談にあらずしては、出來得べきものではない。座談なる哉、座談なる哉。此座談術の一書は實に我が國民の此缺點を塡補し、社會人としての生活を愉快ならしむる社交の要術であり、處世の妙道である。大は外交の折衝より小は一家の團欒に至る、座談の範圍は廣く、其の用途は多岐、本書は此の廣範圍に亘り、其の用途を盡くして多大の敎訓を與ふ。蕪辭を卷頭に錄して推賞の意を明にす。

昭和六年、秋宵相語るべき九月の夕

目次

人生と座談……一
一　人間は社交的動物……一
二　社交と意志表示……二
座談の眞價……五
一　座談の威力……五
二　座談の魅力……八
近い例がロンドン會議……一〇
西郷と勝……一一
三　演說と座談の相違……一四
群集心理と共通觀念……一六

座談は應同性と變化に富む……一八
座談會の流行……一〇

座談の要領

一　まづ的を射よ……一三
二　話材のストック……一五
三　簡潔にして周到……二〇
四　沈默と多辯……二二
五　言葉は教養の反映……二五
六　言　靈……二七
「解らせる」こつ……二九
難解と平易……四〇
原語と術語……四一
方言の矯正……四二

用語選擇の第一條件……四五
上品な言葉、下品な言葉……四六
七　言葉と表情……四九
明るい笑顔……五一
好感と惡感……五四
八　座談と人格……五六
九　座談と勇氣……六四
保險勸誘のこつ……六六
女教員の機轉……六八
當つて碎けろ……七二
十　座談の呼吸……七四
上手な懸引……八〇
要領を得た「不得要領」……八二
糧を敵に借りる……八二

十一 皮肉と諷刺……八五
鹽の味……八六
金持と犬……八七
乃木總督の一言……八九
大王と盜賊……九〇
哲學者と富豪……九二
石黑忠悳翁の諷刺……九四
濫用は禁物……九六
十二 比喩と例話……九九
比喩の効果……一〇〇
頂門の一針……一〇二
未亡人と母蟹、子蟹の話……一〇三
引例としての實話……一〇五
十三 座談と洒落……一〇八

洒落のいろ〳〵……一〇九
番頭の頓智……一一〇
リンカーンと外套……一一二
禿頭の愛嬌……一一三
十四 服裝と態度……一一四
身分相應の服裝……一一五
自然の態度……一一八
言外に物を言ふ眼のつけ所……一一九
つゝましやかであれ……一二〇
十五 座談と癖……一二二
惡口とかげ口……一二三
聞苦しい自慢癖……一二四
自稱大家の失敗……一二八
反對屋、あまのじやく……一二九
表情と無くて七癖……一二九

十六 座談の聽き方……一三〇
聽手の親切と不親切……一三三
十七 訪問の心得……一三七
訪問前の準備……一三九
岸邊福雄氏の機智……一四〇
相手を知れ……一四四
贈物の是非……一四四
乃木將軍と贈物……一四六
眞心の贈物……一四八
初對面の挨拶……一四九
辭去のしほ時……一五一
十八 接客の心得……一五三
居留守は非禮……一五四
某講演家の失敗……一五七

二つの教訓……一六〇
訪問を受けたら……一六二
十九 玄關問答……一六五
二十 挨拶の仕方……一七一
二十一 初對面の座談……一七五
苦い經驗……一七六
大隈侯とカイゼル……一七七
豫備知識……一七八
さぐりの入れ方……一八〇
開口辭と名刺……一八二
うまいきつかけ……一八四
自己紹介の要領……一八七
二十二 讃辭と苦言……一八九
お世辭と追從……一九一

苦言と忠告……一九二
鞭と林檎……一九四
因果はめぐる……一九五
常陸山と常の花……一九六
雅量と狹量……一九九
二十三　女性と座談……二〇一
女性は談話の天才……二〇三
駟も舌に及ばず……二〇五
虚榮の代價……二〇七
多辯と饒舌を愼め……二一〇
座談と實際……二一二
一　貴賓に對する座談……二一三
將軍と書生……二一四

二　目下との座談……二二三
山岡鐵舟と清水の次郎長……二二五
「人を見て法を說け」……二二七
三　答辯式座談……二二九
四　就職戰術とその座談……二三一
小學校長から官房主事……二三三
一路邁進……二三五
唯一のバックは母……二三六
五　職業的座談……二四〇
商戰の武器……二四一
客によりて態度を變へるな……二四三
上原大將と家具屋……二四四
損して得とれ……二四六
お客の叱言は良藥と思へ……二四九

六　金錢貸借の座談……二五一
好意が仇となつた實例……二五一
二種の借金……二五三
上手な借り方、下手な貸方……二五五
催促の仕方……二五六
借り方いろ〳〵……二五七
單刀直入がよい……二六〇
返濟できなかつた場合……二六二
七　異性間の座談……二六五
女性の共通點は何か……二六六
行商人の頓智……二六八
女性の標準……二六九
八　師弟の座談……二七一
九　婚姻と座談……二八二

十　夫婦間の座談……二九〇
十一　吉凶と座談……二九六
慶祝……二九六
弔問……二九八
病氣見舞……三〇一
附錄……三〇五
笑ひの種……三〇五
川柳……三一一
狂歌……三一三
話材としての逸話……三一七
獵官者擊退法……三一八
大久保と桐野……三二一
舌を拔かれた呆卿……三二二

少年一休……三三四
無言の歡會……三三六
極樂地獄問答……三三八
小僧の求職……三三八
表情の力……三四一
おしやべり封じ……三四二
王安石と太湖……三四三
政宗の一喝……三四四
自家撞着……三四七
景時と重忠……三四八
大砲と大喝……三五〇
ソクラテスの問答……三五二
デモスセネスとゼスチュア……三五四
お尋者が玄關番……三五五
惡漢と惡漢……三六一

交渉應對

座談術

大日本雄辯會講談社編

人生と座談

一、人間は社交的動物

「人間は社交的動物である」と謂はれてゐるが、事實、社交といふことは人間以外の動物世界では見られない現象のやうである。絶海の離島で孤獨の日を送るか、深山幽谷に入つて仙人にでもならざる限り、人間は一日だつて、社交なしには世の中を渡ることが出來ない。多數の人間が相集つて一つの社會を組織し、團體生活を營んでゐる以上、どうしても人と人との交渉、接觸が行はれなければならぬ。社交は、そこから必然的に生れて來るものなのである。

社交――それは決して宴會で皆と酒を飲んだり、ダンスホールで踊りぬくやうな特別な交際ばかりを指すのではない、日常普通の交際がすべて社交であつて、親子、夫婦、兄弟間の交際も、一種の社交だといへる。卽ち人間生活のあるところ必ず社交があり、社交なくしては人間生活は亡びるといつても、決して過言ではないのである。社交が圓滿に行はれてゐる社會は、自ら平和な空氣に包まれ、拙劣な誤つた社交は、やゝともすれば社會不和の因を作り、時には忌まはしい爭鬪をさへ惹き起すやうな結果となるのである。社交の巧拙が、自己及び社會の幸不幸に、重大な關係を有することは、最早多言を要せずして明らかであらうと思ふ。

二、社交と意志表示

ところで、此の社交の中で最も大切なことは、いふまでもなく自分の意志を最も巧みに、そして明白に表示することである。意志を表示する場合、一寸頭を下げるだけでも事足ることもあるし、簡單な手眞似で目的を達することもある。又文字によつても用が足りる場合も少くない。犬が尾を

振つたり、猫が喉をゴロ〳〵鳴らしたりするのも、やはり其の嬉しいといふ氣持を表現してゐるのであらう。けれども最も普通で、最も明確で、而も直接的な方法は、言葉による表現卽ち座談であつて、吾々日常の意志表示の殆ど全部が座談であるといつても差支へない。だから若し座談を、人間社會から取りのけたとしたら、恐らく社交といふやうなことも生れて來なかつたであらう。言葉を有するといふことが、人間をして社交的たらしめたので、人が社交的動物であるといふことが出來るなら、人は話す動物であるといふことも、當然いひ得る筈である。

人間が社會的生活を營むためには、社交の必要であることは、誰しもよく知つて居るに拘らず、社交の最も重要な役割を演ずる座談の研究が、全然等閑に附されてゐるのは何故か？

由來、我々日本人は、昔から語るといふことを、卑しいこと、危いこととして戒められて來た。「口は禍の門」とか、「駟も舌に及ばず」とかいふのは、無論、絶對に口を開くなといふ意味ではなく、言葉は愼むべきものであるぞよと敎へた諺に過ぎないにしても、それが極端に解釋せられて、必要な場合にまで、口を緘して沈默を守ることが賢明であると考へられて來たのである。

成程口の禍は恐しい、うつかり口を開いたばかりに飛んでもない不幸につきまとはれるやうな實例も決して少くはない。けれども今日のやうな複雜な社會に處して行くためには、そんな消極的

な引込思案は禁物である。否、もつと積極的に「禍の門」といはれた口を「幸の門」とするために、我々は如何に語るべきかといふ事を研究すべきである。

座談の眞價

一、座談の威力

諺に「丸い卵も切り様で四角、物も言ひ様で角が立つ」といふことがあるが、なか〳〵うまいことを言つたものである。同じ様な意味のことを述べるにしても、或人はそれを丸く表現するが、或人は角を立てる。一方は、相手から好感を以て迎へられるが、一方は、相手に不快の念を抱かしめる。人間一生の成功不成功の岐路が、ほんの一寸した座談の巧拙によつて左右される例は、決して珍らしくないのである。其の證據には、當代社會の第一線に活躍してゐる各方面の成功者に就いて調べて見るとよく分る。彼等の十中八九は、巧妙なる座談によりて今日の成功をかち得たのである。たとひ如何なる不景氣のどん底時代にありても、座談の上手な主人や店員の居る店は、必ず繁昌する。座談は、就職者にとつて學歴以上の條件となり、商店にとつては巨額の資金にも勝る無形

の資本ともなるのだ。國家の一大事が、座談の中にすら〳〵と解決され、失はれんとした愛をも、座談の力でやす〳〵と取戻されたやうな實例は、擧ぐるに遑ない程ある。その反對に座談が下手な爲めに、折角目の前に近寄つて來た出世の機會を取り逃した例も世間にザラにある。同じ商品で同じ値段なら、誰しも愛嬌のない、座談の拙劣な店で買ふよりも、お世辭のいゝ、座談の上手な店で買ふ氣にならう。たとひどれ程美しい顏の持主であつても、座談が拙い女は五割方損をする。況や客商賣の女給に於てをやだ。處世術としての座談の力は、眞にかくの如く偉力なるものである。それなのに、今も尙ほ、老人のうちには「物言へば唇寒し秋の風」を唯一の信條として、口を開かざることを最上の世渡り法と考へてゐるものがある。時代の趨勢を知らざる愚人といはねばならぬ。

世の中はすべて戰である。戰に勝つものは衆人の上に出で優越の地歩を占めることが出來るが、戰敗者はいつまでも下積生活に甘んじなければならない。いくら物好きでも、自ら好んで劣敗者たることを望む者は一人もあるまい。一歩でも人の先に出たい。少しでもよりよき生活をしたいといふのが人情であり、萬人の胸に抱く共通の希望である。

人生の生活戰は、社會が複雜になればなるほど激烈の度を加へる。一寸でも油斷してゐると、い

つのまにか敗者の仲間入りをさせられる。その心構へ、その用意なくして世間に出づるほど無謀なことはない。それだけに吾々は、常住不斷、戰鬪準備を忘れることは出來ないのだ。

然らば其の戰術は何か、太古未開の時代ならば、腕力が唯一の武器であつたかも知れない。しかし現今のやうな文明社會では、腕が强いからとてあながち優者とは限らない。自分の競爭相手を叩き殺して進まうとしても、そんな事は道德が許さない。法律が默つてゐる筈はない。國と國との爭ひには、今日と雖も武力が用ひられるけれども、日常の社會生活に於ては、腕力は微弱な武器としてしか取扱はれて居らぬ。生活戰線に於ける最も有力な武器は舌の力だ。座談術だ。平和の戰爭では、座談の巧拙が其の勝敗を左右し、人間の運命までも弄ぶ。相手を喜ばせるか怒らせるか、笑はせるか泣かせるか、自分の意見を用ひさせるか、用ひさせぬか、或は相手を屈服させるか、相手に屈服させられるか、その間、微妙なる消息は、唯三寸の舌端のみが知つてゐるのである。

座談の威力は眞に怖ろしい。我も、人も、社會も、國家も、座談といふ眼に見えない武器で活殺されてゐるではないか。今後社會の第一線にたち、人の上にたつて活動しようと心がける者は、よろしく細心の注意を以て、處世術としての座談を研究すべしである。

二、座談の魅力

人が自分の意志を表示して、或目的を達しようとするには、手紙でも間に合ふこともあれば、電話で十分なこともある。しかしそれらよりも、もつと強い力を持つてゐるのが座談である事は、前に述べた數項によりて略ゞ了解された事と思ふ。勿論、手紙には手紙としての長所があり、電話の便利な事はいふまでもないが、座談に比すれば其の力がはるかに微弱である。手紙や電話では容易に達し得られない目的も、相手にぶつかつて、對談の結果、存外たやすく達せられるやうな場合がいくらもある。甲が或事件で乙に或相談を持ちかけたと假定する。これまで幾度手紙を出しても一向要領を得ない。それどころか、碌々返事もくれないといふ有樣である。そこで方法を換へて電話で交渉してみたが、相變らず不得要領である。二度目、三度目からは、電話口にも出てくれない。業を煮やして直接に相手方の家を訪問したとする。最初は中々うちとけてくれなかつたが、何かと話し合つてゐるうちに、だん〳〵お互といふものが分つて來る。分つて來ると、手紙や電話のやう

に、おいそれと斷り切れないやうな事情が生れて來る。つまり手紙や電話では感受する事ができない不思議な魔力が、相互の間に醗酵される、それが座談の魅力である。何しろ相手を惹きつける一種の力だ。電話も談話の一形式には相違ないが、お互の顏が見えず、機械の仲介によりて話すだけに、其の力は到底座談に及ばないのである。

手紙でもその通りで、自分の考へてゐること、思つてゐることを、そのまゝ相手方に訴へても、それがうまく的に當るか、どうか。先方にどう響くか、一寸見當がつかない。まるで砲兵の遠距離間接射擊といふところだ。ところが、それが座談となると、打てば直ちに其の響は自分にはね返つて來るから、文字には表はし得ない言葉の調子や先方の顏色によつて、自分の意志がどこまで先方に通じたか、自分の目的がどこまで達せられたかを知る事が出來るのである。たとひ不幸にして、それが全然無効に終つた場合、寧ろ相手の感情を害するやうな結果を招いた場合でも、卽座に反響を見てとる事ができるから、第二段、第三段の心構へ——此の場合、先方に考へ直させるにはどうしたらよからうか。先方の感情を和らげるには、どうしたならばよからうか。其の策戰をたて直す事が出來る。つまり最初に先方を怒らすやうなヘマをやつても、膝つき合はせて語り合つてゐる中に、いつとはなしに自分の心持を對者に十分了解してもらふ事もできるのだ。それが座談の特色で

ある。何等の間際媒介を要せずして、直接相手にぶつかつてゆくところに、座談のつよみがある。

近い例がロンドン會議

むづかしい外交上の談判や、政治上の交渉といふやうな公式會見の收穫も、その大半は、豫備的行爲としての私的な座談によつて得られる場合が多い。近い例はロンドン會議だ。公式に各國の全權が會合して、軍縮問題を議するとなると、それ〴〵自國の立場を强硬に主張し、容易に解決點が見出せなくなるので、公式會見以前に、日本の松平全權や米國のスチムソン全權等の間に屢〻私的な會合が行はれ、公式の場合のやうに四角張らず、極くなごやかな空氣の中に、胸襟を開いて談合する事にしたので、その間に、互の妥協點が見出され、さしも困難であつた、一時は決裂の外なしとさへ憂慮された軍縮會議も、どうやら各國の互讓によつて、解決點に到達したのである。若しかうした私的會合が催されず、公式の會議のみであつたなら、恐らく喧嘩別れをして、今頃は各國とも財政難に苦しみつつ、製艦競爭に夢中になつてゐることであらう。

西郷と勝

有名な江戸城明渡しの談判にしてもその通りだ。國家にとつても、幕府にとつても、まことに容易ならぬ危機に面したあの場合、江戸百萬市民の安危を決したのは、いふまでもなく西郷隆盛、勝安房兩氏會見の結果であつたのである。一方は官軍の使者として、一方は幕府の代表者として、共に公式に會見したのであるが、英雄の心事は淡として水の如く、談笑の間に此の重大問題を解決して、百萬市民を戰禍の苦しみから救ふ事ができたのである。

當時勝は、西郷と會見する爲め、從者一人を召連れて薩摩屋敷に乘り込んだのであるが、英雄、英雄を知るで、座に就いた瞬間、二人の間には固い〳〵心の握手がかはされたのである。兩者はまるで百年の知己の如く打解けて話しあつたのである。

西郷が例の調子で、

「お困り召されたかな」

と云ふと勝も輕く笑つて、

「なんで俺をこんなに苦しめなさるのぢや、これからは俺が貴方に代つて官軍を指揮するから、貴方が俺に代つて江戸城にたて籠つて貰ひたいな」

といつて、互に呵々と大笑した。しばらくして勝は再び言葉をついで、

「今度、貴方が來て下すつたので、俺もすつかり安心しましたよ」といつて、再び朗らかに笑つた。彼は全く敵の使臣といふことさへ忘れてゐるかのやうに見えた。もうこれで重大な國家の安危にかかはる問題の豫備的交渉はすんだのだ。未だ一語も城明渡しには觸れてゐないけれども、二人が膝つき合はせた刹那、兩者の間にはチヤーンと心と心の諒解ができてゐたのである。

いよ〳〵談判となると、勝は赤誠をこめて、官軍の江戸城攻撃を阻止するやうに歎願した。勝の胸中には、江戸八百八町を兵火の慘害から救ひたいとの念願より外なかつたのである。西郷は大きくうなづいて、

「御説御尤もに存じ申すが、それには先づ慶喜公恭順の實を示されずばなるまい。慶喜公が御自身から御謹慎遊ばす、それが第一でござる」

「それは勿論の事でござる」

「それなら改めてお聞き申すが、江戸城は直ぐにお渡し下さるかな?」

「如何にもお渡し申す」

「兵器彈藥は?」

「何の異存がござらう」

「しからば軍艦は?」

「その點でござる。陸軍の事なら吾等の一存でどうにでもなり申すが、軍艦は榎本が預つてゐますでな、思ふまゝにはなり申さぬ。何分にも榎本は吾々の説に同意せぬので、軍艦の方は殘念ながら請合はれませぬ。其の他の事なら何でも、江戸城の明渡しも兵器彈藥の引渡しも必ず拙者責任を以てお引受け申す。どうぞ吾々の心底をお察し願ひたい。一口に旗本八萬騎と申すが、それに伴ふ兵數は莫大、其の他に幕府に殉ずる藩兵もあり、今江戸の混雜は一通りでござらぬ。若し明日にも官軍の攻撃がはじまつたなら、それこそ大事、江戸百萬の人民はおろか日本國中修羅の巷となることは火を睹るよりも明らかでござる。兎に角明日の攻撃だけは止めていたゞきたい」

「宜しうごわす。いろ〳〵とむづかしい議論も出るでござらうが、先鋒隊のことは自分の自由になりますので、明日の攻撃だけは、一身に引受けて、中止いたさせ申す」

この西郷の一言で、勝ははじめて愁眉を開いたのである。これで江戸百萬の市民と、八百八町の

民家の安全は保證されたのである。さしも困難を豫期された江戸城の明渡しは、かうして兩雄談笑の間に事なく解決を告げ、僅かに上野の一角に砲聲をきいたばかりで、江戸は完全に兵火の慘禍から救はれたのである。いかめしい公的會見の結果ではなくして、兩雄の私的會見――和氣藹々たる座談の間に、難局打開の大道は拓かれたのである。

三、演說と座談の相違

座談は主として言語の力を借りて、自分の意志を人に傳へようとするものであるが、此の點では演說も全く同樣である。座談が意志表示の目標を、目の前の人物に置いてゐると同樣に、演說も、語る人、聽く人が必ず相對してゐる。しかも座談の相手は概して少數であり、僅かに唯一人である場合が多いのに對して、演說の場合は必ず多數、少くも座談の時より多數であることが普通である。演說では時によると數千人、甚しきは萬を越えることも珍しくないのだ。所謂聽衆といはれるのはそのためである。同じく語るといふ行爲であつても、演說と座談ではまるで呼吸が違ふ、壇上に

立てば一世を風靡するやうな大雄辯家が、さて座談となると碌々口もきけないといふやうな例も、世間には往々ある。反對に、座談にかけては天下一品、何人でもチヤームされてしまふやうな名人が、演壇に立つと目がくらんで、ガタ〳〵震へ出し、一言も物が言へないといふやうな種類の人も珍らしくない。吾輩が演說がうまいから座談なんか研究する必要はないなどといふ人があつたら、それは演說と座談とを一緒くたに考へてゐる迂濶者といはねばならぬ。演說會に行つて見ると、種種雜多な多數の聽衆が集つてゐる。殊に通俗講演會などになると、老人も居れば若人もゐる。男も居れば女も居る。職業に於ても、地位に於ても、みんなちがつた人々である。よしや會の性質上同一の年齡、同一の職業を持つ者のみが集つたとしても、其の顏の異る如く、其の思想や感情は違つてゐる。そこに來ると地方の青年團や女子青年團の集合は大分違ふ。農村の女子青年團員は、概して年齡も職業も揃つてゐるけれども、それでさへ思想的には可なりの相違が認められる。一方には新時代の空氣に觸れた、多少尖端的の女がゐるかと思へば一方には古典的な昔風の娘もゐる。女子青年會、尙然りである。況んや他の集會に於てをやで、どこの演說會、講演會に行つても類似の聽衆ばかりを集めることは全く不可能だ。講師はさういふ集會に臨む場合、最初から種々雜多な人間が集つてゐると覺悟しなければならぬ。

群集心理と共通觀念

ところが有難いことには、多數の人間が一堂に會した場合には、各個人の個性が失はれるか、著しく其の力が弱められて、その代りに群集心理が働き、年齢や、性や職業を超越した共通觀念が發生する。そして非常に感情が動き易くなる。婦人會などでよく經驗することだが、一人が感激して泣き出すと、その感情が忽ちにして全聽衆に感染してしまふ。だから講師、話者は、常に一人一人の思想愛情よりも、全聽衆の心の動き、共通觀念の把握といふことを念頭に置かねばならぬ。雄辯なる政治家は、よく此の群集心理を利用して、聽衆の心に深い印象を刻みつける。さうした場合、聽衆は全く我を忘れて、話者の思ふがまゝに左右され、隨分突飛な行動でも、平氣でやつてのける。演說講演の成功不成功は、一に聽衆の共通觀念をつかみ得たか、否かによつてきまるといつても過言ではない。

ところが座談となると、まるで見當がちがふ。相手は一人か、さもなくても割合に少數であるから、個人心理がハツキリと生きてゐる。演說の場合のやうに、簡單に感情が動かない。一人の場合

は勿論のこと、相手が複數であつても、共通的觀念を生ぜしめることは極めて困難である。其の代り演說では、聽衆に多大の感動を與へても、それは決して永續しない。直ぐに忘れられてしまふが、座談では、容易に相手を動かし得ない代りに、一度それが相手の胸奥に深く觸れたが最後、其の感銘は容易に失はれないのである。

又演說では、群集心理によつて自由に聽衆の心を動かす事はできるが、同時に、冷靜な、正しい判斷を與へる事が出來ない。近頃頻々と勃發する罷業の心理もこれだ。百人なり千人なりの從業員が、雇主に對し日頃不平を抱いてゐたとする。そこへ、煽動者があらはれて盛んに焚きつける、それに動かされて、多數の從業員は「やれ〳〵！」「仕事をやめろ！」といふやうなことを言つて騷ぎ立てる。こんな時に若し雇主が多數の從業員を一堂に集め、罷業の不合理を說いたとしたらどうであらう。雷同性が異常に働いてゐる罷業員には、物事の條理が解る筈はない。いはゞ火に油を注ぐやうなもので、彼等の感情は一層激成されるばかりである。

だから、雇主が罷業團の要求に回答する場合、若しくは罷業團を切り崩さうとするやうな場合には、決して多數の罷業員を相手にしてはならぬ。僅か數人の代表者を選出せしめて、其の代表者と會見するか、個々別々に談合する方が、遙かに効果的である。

其の場合、代表者は、鐵壁をも打碎かんず意氣込みでやつて來るが、さて、面と對つて循々と話されてみると、雇主の方にも相當道理があるやうにも思はれ、又自分の將來のことや、家族の生活問題といふやうなことまで冷靜に考へさせられる。即ち個人心理が明瞭に働いて來るのである。一方は群集心理によつて効果を收めようとし、一方は個人心理に觸れて、收穫を得ようとするところに、演說と座談との根本的相違があるのだ。

座談は應同性と變化に富む

演說でも、座談でも、豫め何を語るべきかの用意はあるべき筈である。しかし座談は演說よりも遙かに應同性に富み、變化が自由である。そこに座談の特色があるのだ。辯士が演壇に立つて、滔々と所信を述べる。ところが意外にも聽衆がサツパリ共鳴してくれない。辯士は困りきつて、話の途中から、

「此の話は皆さんのお氣に召さないやうでありますから、他の問題に移ることと致します」

といつて、話題を轉じたとしたらどうだらう。それも場合によつては、一度は、どうにかつなぐ

事もできようが、これもいけない、あれもいけないで、二度も三度もそれをくりかへしたら、聽衆は何といふだらう。

「一體あの人は、何を言はうとしてゐるんだ。まるで盲滅法ぢやないか」

と、あいそをつかされるにきまつてゐる。

ところが座談に於ては、其の點、極めて自由である。持ち出した話題が、相手の氣に入らないやうだ、興味が薄いやうだなと思つたら、幾度でも話頭を他に轉ずる事もできるし、勝手に話材をかへる事もできる。一つの話が行き詰りさうになつたら、

「それはさうと……」

「話はかはるが……」

「時にあの問題は……」

といふ風に、極めて自然に相手を惹きつけて行く事ができる。之は誰しも經驗のある事と思ふ。

座談が、演說に比べて應同性、自由性に富む理由は、いふまでもなく演說が獨白形式であるに反し、座談は複白形式だからである。演說では、語る人と聽く人とは全然別々だ。辯士、話者は最後までひとりで語り續け、聽衆はたゞ聽くだけである。しかし座談では、語る人同時に聽く人だ。二

人ゐれば二人、三人ゐれば三人、共に語ることも出來れば、聽くことも出來る。演說會では聽衆が勝手にしやべり出したら、どうにもをさまりがつかなくなるが、座談では、會する者全部が語つたところで、ちつとも差支ないばかりか、それでこそ座談の意義があるのだ。獨白形式の演說では、自分の語つたことが、果して聽衆に徹底したかどうか、十分なる感興を與へ得たかどうか、それを知るのは聽衆の態度に徵する外はないが、複白形式の座談の時には、直ちに言葉となつて反響して來るから、其の反響の如何によつて自由に、話題を轉換させることが出來るのである。

座談會の流行

近頃、一流二流の新聞雜誌が、競つて座談會を催し、各專門の學者や素人の名士を招待して、其の記事を紙上に掲載する事が、一つの流行のやうになつてゐる。曰く金儲け座談會、曰く不景氣打開座談會、曰く就職座談會、曰く何、曰く何、よくもこんなに問題があるものだと思はれるほど、あとから〳〵と出て來る。何故座談會がこんなに流行して來たか。その理由はいろ〳〵あらうが、一言にして言へば、それは現代人の欲求だと答へることが出來る。

現代は大衆の時代である。すべてが大衆的である。何百何千といふ多數の民衆を一堂に集めて演說會が開かれる。何萬何千といふ大衆が一つになつて示威運動をする。こんな場合には既に前に述べたやうに群集心理に支配せられ、雷同性が強くなり、どこ〳〵までも表面的で、皮相に流れ易く、個人々々の眞意を叩くことが出來ない。即ち個人々々の要求に應同した談話を聞く事が困難になつた。そこで一つの問題について論議するにも、獨白形式の演說よりも、複白形式の座談の方が、却つて眞相に觸れ易いといふ事がわかつて來た。つまり現代人が、座談を歡迎するやうになつた理由は、端的に其の効果利益を認めたからである。

もう一つ、座談會が、今日の如く盛んになつた理由は、一つの會といふ形式のもとに、各自職業の異つた人々が五人なり十人なり集つて、ある一つの問題、若しくは案について自由に語り合ふところに、其の問題に對する批判の公平さがあり、ちがつた立場から述べる意見の中に、お互に思ひがけない發見をする事がある。其の上、肩のこらぬ極く輕い氣持で語り、且聽くことが出來るといふ氣安さも手傳つてゐる事勿論である。

例へば、スポーツについての座談會が催されるとする。其の道の專門家も集まれば、醫師とか、運動具業者とか、新聞記者とか、教育家とか、直接間接の關係者も集る。時にはまるで緣のない人

人まで加はつて、各自違つた立場から、同一問題について勝手に意見をのべる。それが却つて面白いのである。

要するに座談會の價値は、玄人、素人の別なく、一面識の人、舊知の人、半知半解の人が集まつて、打ちくつろいで、輕い意味で語り合ふところにあり、みんなで一つの寄せ木細工を作るところに座談會の面白さがあるのだ。而して座談會の効果は、集つた人數の多少に大關係をもつてゐる。二三十人も集つたのでは、大勢過ぎて混雜するし、二人や三人では、あまり冷靜になり過ぎて、なか〳〵本音を吐いてくれない。問題にもより、集る人の種類にもよる事だから、一概に何人が適當といふことは出何ないが「キング」其の他大雜誌に見受ける座談會の記錄を調べて見ると、十人內外といふのが最も適度のやうである。

それは兎に角、座談會の流行はまことに喜ぶべき傾向で、將來は一層座談會の範圍をひろめて、市役所とか町村役場などに於ても、市町村會以外に、各方面の代表者が集つて、互に腹藏なき意見を述べ合ふ機會を作つたら、たしかに、より以上行政の能率を擧げ得るにちがひない。時勢が大衆的になればなるほど、其の半面に、個々の要求に應同した座談會の隆盛を見るにちがひない。

座談の要領

一、まづ的を射よ

演說でも、座談でも、すべて「話す」といふことは、ちやうど弓に番へた矢を放つことと同じやうなものである。矢を放つといふだけのことなら誰にだつて出來る。むづかしいのは其の矢を的に當てることだ。しやべるだけなら誰でもしやべる。狂人でも醉拂ひでもしやべる。單に口を動かすといふだけなら、そんな連中の方が、餘計達者かもしれない。しかしそれは、たゞ達者に口を動かすだけで、何の目的もなければ、話す對象もない。ほんとの巧妙な話といふのは、相手に聽かせ得る話だ。話の目的は、しやべることではなくして聽かせることである。

「人を見て法を說け」といふ言葉がある。これは話の極意を敎へた千古の金言である。演說であらうと、座談であらうと、語るためには、先づ相手を知らなければならぬ。相手を知らずに語らうと

するのは、的を見ずに矢を放つの愚と同類である。こんなことはあまりに分り切つたことであるといふかも知れない。殊に座談に於ては相手が少數であるから、的を知ることは容易だといふかも知れない。しかし實際問題となると、それがなかなか困難なことなのである。

思ひがけないお客が來た、御馳走をしなければならぬ。何を出したらよからうか、それがいつも主婦の惱みの種となる。お客が何が好きか、どんなおかずを喜ぶか、まるで見當がつかない場合がある。きつと喜ぶだらうと思つて出した料理に箸もつけられず、失望したといふやうな苦い經驗は、どこの家でもよくある事だ。

話でも同じ事だ。相手かまはずべラ〳〵としやべり通したとて、決して成功するものではない。老人なら老人、青年なら青年、子供なら子供、知識階級なら知識階級と、聽衆の質により目標を定める。定めた的を狙つて話を進める。それが話を成功させる第一の要領である。それを知らずにやると、二時間しやべつても、三時間しやべつても、結局「馬の耳に念佛」の徒勞をくりかへすに過ぎない結果となる。注意すべき事だ。

二、話材のストック

話者が、自分の語らうとする對象、卽ち的がほゞ分つたとすると、次に必要なことは、それに適當した話材を用意することである。折角お客の好物が分つたとしても、其の御馳走を拵へる準備、材料がなかつたのでは何もならぬ。いつか或る講演家が、友人と旅先で、ちやちな小料理店に入つた。壁に貼りつけた紙を見ると、食慾をそゝるやうなものが何もない。仕方がないから親子丼でも食はうと、それを二つ注文した。看板にお手輕と書いてある以上、すぐ出來るのかと思つたら、いつまで待つても出してくれない。こちらは急ぐ旅だ。主人を呼んで催促すると、此の男頗るのへうきん者で、

「へい唯今、裏で牝鷄が卵を生むのを待つてをりますので」

といふ答へである。あまりばか〳〵しくて怒ることもならず、其の儘引きあげたといふ話があるが、演說や座談の席で、まさか話材の卵が生まれるのを待つわけにはゆくまい。殊に座談に志す

ものは、いつ、いかなる場合にも、直ぐ引き出せるやうな話材のストックと、時勢に遲れないだけの心がけが必要である。

Kといふ男があつた。十數年前田舍から上京して、市の小學校に奉職しようとした時、視學の前に呼ばれて口頭試驗を受けた。

「君は、何が一番好きかね」

Kは其の頃、特に童話に熱中してゐたので、端的に、

「童話が一番好きです」と答へた。本人は無論視學が童話の研究なんかしてゐようとは思はないから、これ以上追求はしないだらうと思つてゐると、視學は笑ひながら、

「さうか、それは面白いね。ところで、君のやうに、兒童の讀物を研究してゐるものの立場から、今日の國語讀本に對して、どんな意見を持つてゐるかね」

Kは日頃抱懷してゐる所信を滔々と述べた。視學はだまつてきいてゐたが、再び言葉をついで、

「子供の話をするにしても、全然近代思想に觸れないといふことはあるまいと思ふが、君は思想的にどんな信念を持つてゐるかね」と來た。

Kは聊かヒヤリとしたが、幸ひに其の方面には、相當自信を持つてゐたので、問はるゝまゝに、

いろんな話材を交へてスラ〳〵と答へた。それが視學の認むる處となつて、Kは即座に採用許可となつた。

「いろんな話材をもつてゐるといふ事は、いかなる場合にも非常な强味ですなア」

と、Kはあとで述懷した。

事實、話材の少いといふことは、座談に際し甚だ心細いことである。少し位の話材では、すぐ種切れになるからだ。あの人はいつ來ても、同じやうな話ばかりすると言はれたらおしまひだ。よく語らんとする者は、常に豐富なる話材を用意せよ。これだ！

然らば話材は如何にして得るかといふ問題が直ちに考へさせられる。しかしこれには別に秘法も何もない。常に注意して人の話をきいて置く事だ。注意していろんな本を讀んで置く事だ。つまらんと思つて聞けば、どんな人の話でもつまらん。身を入れて聞けば、どんなつまらぬ話の中からでも、二つや三つの話材は見つかるものだ。どんな小さなヒントでもいゝ、逸話でもいゝ、それをよく消化し、吸收して置くと、きつと何かの時の役にたつものだ。

次には讀書だ。まとまつた組織的のものも、勿論讀まねばならぬが、それよりも生きた話材が、毎日新聞紙や雜誌の中にころがつてゐるのを見のがしてはならぬ。社會の日々の動きを、目の前に

見せてくれるのは新聞紙だ。記事はいふまでもないが、廣告面にも時勢の影がうつつてゐる。時々新聞にゴシップの種をまくのが、警官や活動辯士などの試驗答案だ。レニンを藥品の名前と間違へたり、蔣介石は燧石の一種なりと答へたり、左傾とは力學の言葉で、左に傾く事だと書いたり、思はずふき出すやうな珍答案が出る。

これらは要するに法律書類を丸呑みする事にのみ專心して、活學に留意しない結果である。日常の新聞雜誌によりて常識を養ひ、活ける學問をして置きさへすれば、決してこんな滑稽な間違ひを起す筈はない。

同時に吾々は、耳や目を通じて、話材を得るばかりが能ではない。自分の過去の經驗も、亦、立派な話材になり資料になる事を忘れてはならぬ。更に一歩を進めて、それらの話材の綜合知識から出發した、一種の獨創的な比喩や、警句を加へる事ができれば、座談の上に一段の進歩と變化と興味を增す事が出來るのである。

事實、話材の貧弱なる人、其の貧弱さを補ふために、常に最善の努力をする人に非ざれば、今日の如き複雜なる社會の第一線に立つて、社交の唯一武器ともいふべき座談の妙を發揮することが出來ぬ。座談は單に口舌の辯のみで成功するものでない事は前にも述べた。先づ人を見よ。然る後最

も適當なる話材を選擇して投げかけよ。これぞ座談成功の第一要件である。

或る代議士が、自分の友人の家にまもなく出産があるときいて、早速見舞に行くと、細君は大きなお腹を抱へて如何にも苦しげに見えた。

「奥さん、近い中にお目出度があるさうで……」

「ありがたうございます。でも目出度いかどうか分りませんよ。男の方には想像もつかないでせうが、お産といふものは實に苦しいものでしてね」

代議士は笑ひながら言つた。

「いや、奥さん、私の方がもつと苦しいですよ」

細君が不審に思つて、

「エッ、あなたが苦しいとは？」

「だつてさうぢやありませんか、あなたは苦しくともお腹にちやんとあるものを出すのですから、まだよろしいが、私共は始終、頭の中にないのを無理にしぼり出して演説するのですからね」

と答へたといふ話がある。笑へないユーモアだ。

三、簡潔にして周到

座談について、もう一つの注意は、あまりしやべり過ぎてはならぬといふ事である。

誰しも話材が豐富になると、ついしやべり過ぎる傾向がある。古い金言だが「過ぎたるは尙ほ及ばざるが如し」である。話材のあるに任せて、縱横無盡に辯じ立てるのはいゝが、あまりしやべり過ぎて、話の要點が分らなくなるやうでは困る。自己陶醉といつて、自分の辯舌に自惚れると、人は往々こんな滑稽を演ずる。

學生が試驗場に臨む、どんな問題が出るかとビク〳〵してゐる。やがて出された問題を見ると、自分が日頃からよく調べて置いた問題である。しめたと思つて、ペンの動くに任せ、細大洩らさず知つてゐるだけのことをみんな書いた。これなら滿點疑ひなしと、得意滿面で退場した。

ところが數日の後、發表された成績を見ると、實に意外千萬、滿點どころか、ふだんの點數にも及ばないといふやうなことがよくあるものだ。これは、採點者の見方にもよるが、あまりに書き過

ぎたために、豫期に反した結果を招いたのだ。採點者は、何百枚、多い時には何千枚といふ答案を短時間に調べ上げなければならないのだから、あまり長だらしいのは讀む氣がしない。いきほひ成可く簡にして要を得た答案に多くの點數を與へるといふ事になる。

座談でもその通りである。下手な長談義は最も禁物である。殊に今日のやうな忙しい時代に於てをやだ。閑談はともかくとして、要談などの場合は、出來るだけ簡潔にと心がけるがいゝ。

それかといつて座談は、簡潔第一、短くさへあれば何でもよいとは決していへない。簡單に、手短かにといふことのみに捉はれて、必要な事柄まで省略してしまつては、角を矯めて牛を殺すの類で、座談の目的は達し得ない。できるだけ簡潔にと心がけると同時に、自己の意思を相手に徹底せしめるためには、飽くまで周到なる用意を忘れてはならぬ。

簡潔といふことは、短い時間内にうまく要點をつかんで、巧妙に話を進めてゆく事で、不必要な言葉を口に出さないことだ。

周到にといふのは、たとひそれがどんな小さな事であつても、必要だと思ふ事は言ひ落さぬことだ。これだけの用意があつてこそ、所謂要領を得た話が出來るのである。

四、沈默と多辯

言ひ古した言葉ではあるが、何事にも中庸といふことが大切である。話の要領もそこにあると思ふ。「沈默は金なり」といふ金言があるが、これは多辯饒舌を戒めるための反語であつても、年中啞で通せといふ意味では無論ない。況や今日は時勢が違ふ。我自らの存在を明らかに示すためには進んで沈默を破り、天下に獅子吼しなければならぬ場合が澤山ある。いつまでも「沈默は金なり」なんてすましてゐると、いつの間にか人生の最後列に取りのこされてしまふ。

それかといつてあまり多辯でも困る。いつでも出しやばつて、何か一席辯じ立てないと氣がすまぬ人がある。ろくに知りもしないことにまで、口を出したがる人がある。さうなると却つて人から敬遠されてしまふ。「一言居士」のニツクネームでも頂戴して、物笑の種にされるのがおちである。沈默と多辯はともに兩極端だ。必要のない時には沈默を守り、語ることが當然と考へた場合には、大いに辯舌を振ふ。これが本當だ。

むづかしい用談ぬきの親しい集り、今日は無禮講でやらうぢやないかといふ申合せ。何を話してもいゝ、大いに愉快に語り合ひたいといふ時に、一人でも、だまりこくつて、つくねんとしてゐる者があつたら、どんなに座がしらけ渡るであらう。たつた一人のために、愉快な氣分がすつかり破壞されて、みんなぶつ／＼いひながら、つまらなく歸つてしまふ。沈默の罪に非ずして何ぞやだ。

それかといつて、そんな場合、他の者には口を利かせず、自分一人でしやべり散らすやうな人にも困つたものだ。こんな人が一人でもゐると、座がしらけるばかりでなく、其の人に對する反感から來會者の不平不滿が爆發し、飛んでもない騒動が持ち上ることさへある。沈默でもいけないし、多辯に過ぎてもいけない。モダーレーション！　この呼吸がむづかしいのだ。

如何なる會合でも、話の中心人物がしぜんに出來るものである。別に、意識して、誰を中心にしよう、自分が中心人物にならうときめないでも、いつの間にか一人の人を中心に、話が交はされるやうになるものだ。多數集合の場合には、數個の中心點が出來上ることがある。一つの卓、一つの火鉢を圍んで、いくつかの組に分れると、それ〴〵一人づつの中心人物が出來る。そんな場合、中心人物になつた人は、いゝ氣になつてしやべり過ぎてはいけない。特に人身攻擊や自己宣傳は慎まねばならぬ。又他人の發言中に横から口を出したり、他人の議論を頭からけなしてかゝるやうな非

協調的な行爲は、力めて避けなければならぬ。

會席の座談は、彼一語、我一語、ポツリ〳〵と、靜かに、穩かに、對者に敬意を拂ひつつ話を進めてゆく。それが座談の上乘である。何か特別な相談、協議の集りでない限り、あまり責任のある話よりも、所謂、雜談、漫談、乃至は趣味的な話の方が、いゝものである。それには、自分の周圍の人々の嗜好、職業、年齢なども考へ合せて、互にさし障りないやうな話材や言葉を選ぶことが大切である。最近、某氏が、或る集會に出席したところが、大部分知らない顏ばかりで、心細く思つてゐると、遲れて一人の舊知が入つて來たので、喜んで雜談に耽つてゐる中、其の人が、

「全く此の頃のやうな不景氣ではやりきれないよ」

と泣言をいつたので、某氏は笑ひながら、

「そんなにくよ〳〵するなよ。つまらんことに頭をなやましてゐると、早く頭が禿げるぜ」

とからかつたが、あとで氣がつくと、すぐその側に、禿頭の紳士がゐるので、大いに赤面したことがある。

宴會で餘興がはじまつた時に、勝手に隅つこの方で何事かひそ〳〵話し合つてゐるのは心ないしわざである。よしそれが罪のない雜談であつても、決して會衆にいゝ氣持を與へるものではな

い。たとへ自分が唄や踊に興味を持たなくとも、ひそ〳〵話だけは愼みたいものである。

序だからこゝで述べるが、各種の演說會、講演會などの聽衆席で會話を交すが如きは、辯士、講師に對する大きな無禮である。甚だしきは、來賓席で高聲に話し合つてゐる人を見受けるが、以て の外のことである。演說中、講演中には、よし誰樣がおいでにならうと、くど〳〵挨拶などすべきものではない。それは講演がすんでから、休憩時間內に出來ることである。要するに、會席のやうな場合には、特に全體の空氣を尊重し、一人よがりの態度を愼しみ、輕くて愉快な社交的談話を交へるやうにするがよい。あまり興趣を深めようとすると、却つて氣分を破壞するやうな結果になるからだ。注意すべき事だ。

五、言葉は教養の反映

A氏がいつか電車に乘ると、眞向ひに、二人連れの若い娘が仲よく並んで腰を下してゐた。二人とも中々シヤンだ。姿も惡くない。服裝も整つてゐる。どつかに品もある。「相當の家の令嬢だな」

と考へてゐると、不意に、

「ちよつとあんた、あれから例のところへ行つた？」

といふ甲高い聲が耳に傳はつた。たしかに目の前の令嬢の一人の聲にちがひないが、あまりにも似合はしからぬ言葉なので、A氏も少々驚いてゐると、もう一人の方が、

「誰が行くもんかい。あんな奴のところへは、二度と行つてやらないわよ」

と答へて、フ、ンと鼻の先で笑つた。まるで男のやうに太い聲だ。何んだか裏切られたやうな氣がして、淡い反感さへ湧いて來た。それとなく睨みつけてやつたが二人は一向平氣であたりかまはず低級な言葉を連發し、くだらぬ事をしやべり立てゝゐるので、我慢しきれなくなつたA氏は、わざと横ぞつぽを向いて、二人の顏を見ないやうにしてゐたが、一度起つた不快の念は、どうする事もできなかつたといふ。

これは吾々が日常目睹する途上の一小事に過ぎないが、どんなに美しく着かざつた美人でも、其の人の口から出る言葉が下品であつたらおしまひだ。其の人に對する敬慕の念は、忽ちにして輕侮の念とかはるに違ひない。美しい着物や白粉でぬりかくしてゐた其の人の素性も、生立も、その一言で看破されてしまふ事うけ合ひだ。「方言は國の手形なり」といふことがあるが、この筆法からい

ふと、言葉は教養の反映であり、人格のレッテルであるともいへる。素性の卑しい、品性の下劣な人間は、どんなに立派な服裝をつけ、どんなに高價な裝身具を身に纏うてゐても、一度口を開いたら、直ぐに地金があらはれてしまふ。所謂お里が知れてしまふからだ。此の人はどんな家庭に育てられた人か、如何なる社會に生活してゐる人か、どの位の教養がある人かといふことは、僅か一二分の談話によつて、殆ど的確にうかがひ知ることが出來るものである。

六、言　靈

言葉は單なる聲の連續ではない。言葉は其の人の生命である。服裝は人をあざむくことは出來ても、言葉は人をあざむく事は出來ない。我が國で「言靈」といはれてゐるのはそのためだ。文字に現はせば同じ「おかはりありませんか」といふ挨拶でも、言葉によつて表現せられるときには、それ〴〵人によつて響きがちがふ。即ち其の人の人格が聲とともに響いて來るのだ。同じ意味のことをいつても、或る者は、對者にいひ知れぬ快感を與へ、或る者は、對者に不快な念を抱かせる。言

葉のあやである。心得べきは言葉である。慎しむべきは言葉である。

顧みて世間の人々は、果して言葉の上にそれ程深き注意を拂つてゐるであらうか。一言半句にも自己の生命が宿つてゐることを考へ、平素から言葉の教養に心掛けてゐる人が果して幾人あるだらうか。何か改つた席に出ようとする時には、誰しも大騒ぎをして、お化粧をする、服裝をとゝのへる、新しい履物を用意する。それも決して無用のことではないが、一番肝腎なのは、言葉の用意が出來てゐるかどうかといふ事だ。いざ座談となつて、十分對者に滿足を與へ、好印象を與へるだけの言葉を持つてゐるかどうか、その準備が出來てゐるかどうか、其の心構へが出來て居るかどうか、之が最も大切な問題だ。結婚の見合の時に、顏にも姿にも申分がないが、あの口のきゝ方ではと、不用意な言葉一つで折角の良緣をふいとした例はいくらもある。まことに「口は禍の門なり」けりだ。

座談を生かすも、座談を殺すも、其の大部分の力は言葉にある。從つて座談の言葉、會話の用語には深甚の注意を要する。ふだんの心がけは勿論の事、どんな場合にもまごつかないやう、臨機應變、快刀亂麻を斷つの概あるべしだ。時により、人により、處により、座談の內容は千變萬化だから、一概にどんな言葉がよいかといふ事を規則的にきめることは出來ぬが、座談用語の選擇上、眼

目とすべき第一條件は、對手によく解らせること、對者によい感じを與へることである。

「解らせる」こつ

解らせるこつ——それはどういふ意味かといふと、一言一句、誰でも了解できるやうな平易な言葉で、解り易く話す事である。

地方の講演會などで、

「あなたのお話は大へん結構です」

などとお世辭をいはれる講師は、大抵此の要領をのみこんだ人である。その證據には、

「私の話のどこがよかつたですか？」

と問ひかへして見ると、十人が十人、

「あなたのお話は言葉がやさしくて、どんな者にもよく解りますから」

といふのが殆どおきまりである。どんなに內容が立派でも、相手に解らせる事ができなければ、猫に小判を與へると同樣全く無意味である。滔々千萬言を費しても、難解、不可解の語句の連續で

あつたら、聽者にとつては、唐人の寢言と少しも選ぶところがなからう。これは明白な事實であるにも拘らず、一般の講演者は、存外この點に無關心のやうである。座談でも、演說でも、聽衆に解らせることができなければ、其の話には三文の價値もない筈だ。解らせる爲めには、話材の選擇も考へなくてはならないし、繪圖や實物を利用するといふこともあらうが、叙述の都合上、こゝでは言葉の方面だけを考へて見ることにする。

難解と平易

解らせる爲めには、どんな言葉を用ふべきかといへば、消極的には難語句を用ひぬことであり、積極的には平易な語句を使用することである。

そんなことは解り切つてるぢやないかといはれるかも知れないが、事實は、日常の會話でも存外むづかしい言葉を使つてゐる人が澤山ある。中には平易な言葉で話すのは、自分の價値を落すやうに考へてゐる人がないでもない。座談の例ではないが、小學校の開校記念日や祝祭日などに招かれて行くと、時々校長のむづかしい話を聞かされる。小學校では講堂が狹いと、式を二回に分けて、

三年生以下四年生以上とするが、その小さい兒童に向つて校長は、

「本日は諸子も御承知の通り、我が校の開校記念日であります。我が校の創立せられたるは明治何年何月何日で、年を閲すること既に何十年、こゝに第何十回目の記念日を迎へ得たるは諸子とともに慶賀に堪へない次第であります。此の機會に當りまして……」

とむづかしい文句をならべる人がある。兒童の方では慶賀どころか大迷惑、そろ〳〵あちこちで騷ぎ出す。すると兩側に立つてゐる先生達が、大きな眼で睨みつける、まるで監視附の講演である。吾々は考へる、何故もつと平易な言葉で解り易く話さないだらうか、解つても解らなくてもいい、或る時間だけしやべれば、それで校長の責任がすむと考へてゐるのかしら。解らぬやうな話ならしない方が功德だ。氣の毒なのは犧牲になる子供であると。——しかもこんな例は世間にいくらもあるのだからいやになる。

原語と術語

中にはやたらに外國語を使ひたがる人がある。又學術上の術語を、相手構はず振りまはす人が

ある。ペダンチックといふやつだ。どうだ、偉いだらう、吾輩は學者だぞ、といふことを衆愚に誇るつもりだらうが、如何にも氣障にきこえる。人間が薄つぺらに見える。それも友人同志とか、同じ職業、同じ環境に生活してゐる人々の間なら格別、相手かまはず外國語や術語をふりまはされてはたまらない。原語によらねば、意味が通じない場合は止むを得ないが、さもなければ、誰にも解る言葉で話す方が、どの位ゆかしくきこえるか知れぬ。

方言の矯正

方言の矯正も、談話の上に極めて大切なことである。同じ言葉でも、地方によつて全然意味の異ることがある。數年前某氏の家で雇入れた女中は、紀州の山奥生れとかで、言葉が解らなくて閉口した。來てから間もなくのこと、書齋を掃除してゐた女中が、仕事をしてゐる主人に向つて、

「旦那様、うるさいね」

といふから、少しむつとして、

「うるさいなら、やめなさい」

といふと、女中は妙な顔をして、

「やめたら、よけいうるさい」

と逆襲して來たので、をかしな女中だなと思つてゐたが、後できいて見ると、うるさいといふのは汚いといふ意味ださうで、書類や何かを取散らしてあるのを見て、汚いと言つたのだといふ事が解つた。方言で同國同郷の友人同志の集會とか、會合とかなら、時と場合によりて愛嬌にもならうが、他郷人の間では物笑の種になつて、思はぬ恥をかくことになる。

或人が東北から來たばかりの青年を、友人の店に世話した處、間もなく、折角だがといつて斷つて來た。どうしたのかと譯をきくと、

「まことに正直さうな、いゝ青年だが、いかにも方言がひど過ぎる。あれではとても客の前には出せないよ」

といはれて、成程と思つたといふことである。

生れた時から覺えこんだ故郷の言葉、いはゆる方言を急に改めるといふことは容易な事ではないが、苟も、座談の練習に志す程の者は、つとめて誤解を招きさうな言葉や、難解な言葉を避け、出來るだけ早く方言を矯正するやうに心がけねばならぬ。それが直らないと、かういつては笑はれ

はしないか、かういふ風に話したら怒られはしまいかと、つまらぬ取越苦勞から、だん〳〵性質まで臆病になり、天賦の雄辯を殺してしまふやうなことも、必ずしもないとは言へないからである。

唯一つの例外は、異鄕で友に會つた時、何年ぶり、何十年ぶりで竹馬の友に會つた時、お互に故鄕まる出しの方言で話し合ふ事で、これは實に愉快なものである。一人は故鄕にくすぶり、一人は東京で榮達して居る友人があつたとする。田舍からわざ〳〵出て來て、懷かしさのあまり都の友人をたづねた時に、都の友人から、全然他人行儀の東京辯でまくしたてられる事は、しみ〴〵幻滅の悲哀を感ずるものである。

「おゝ金助どんか！　會ひたかつたぞ！」

「うん、芳造どんか。よく來てくれたな」

これでいゝのだ。

「おゝ、あなたは芳造君ですか。まことにしばらくでした」

では、せつかく訪ねて行つた甲斐がない。

用語選擇の第一條件

「解り易い」といふことは、座談の用語選擇の第一條件であるといつた。しかしそれは決して條件の全部ではない。單に意味が通じただけで、座談の目的が達せられるものなら、殊更座談を研究する必要はない筈だ。

「おい、金を百圓貸せ！」

これでも、十分、自分の要求を對者に知らせることが出來る。いかに鈍感な對者でも、

「君のいつてる言葉の意味が解らない」

とはいへまい。然り、意味は確かに解る。誰にも解る「金を百圓借りたい」といふ意志は、明瞭に表示されてゐるからだ。問題はこの言葉が、對者の耳にどう響いたかといふ事だ。つまり、座談の目的が十分達せられたか、どうかといふことだ。無論、のつけから「金を貸せ」で通用する場合もある。極く心安い間柄では、これ以上、言葉を費やす必要のない場合もあらう。しかしそれは特別の場合、ごく稀な場合に限られてゐる。いつもこの式で行くと思つたら大間違ひだ。

くりかへして言ふ、單に解らせるといふことだけでは、決して座談の目的を達し得るものではないと。一歩進んで對者の胸によい響きを與へることが肝腎だ。どうしたら對者が、自分の意思表示を快く受け容れてくれるか、それは言葉だけの工夫ではない。用語にも、服裝にも、態度にも、その他いろ〳〵なことに關係する事勿論である。先づ用語について考へてみる。

上品な言葉、下品な言葉

言葉は出來るだけ上品でありたい。下品な言葉は多くの場合、對者に惡感を抱かせる。上品な、きれいな言葉を聞くと、言葉の主が如何にも奥床しく思はれる。他所に行つて、

「便所はどちらですか」

と尋ねるよりも、

「手洗場はどちらでせうか」

とか、

「化粧室はどちらですか」

ときいた方が感じがいゝ。殊に食事中などは尚更の事だ。所が或人が一度此の「手洗場」で失敗したことがある。郊外の或る小料理店で、一寸した宴會があつた時、廊下に出て女中に、

「手洗場はどこか」

と尋ねると、

「どうぞこちらへ」

と女中が先に立つて案内してくれた。何氣なくついて行くと、これはしたり便所ではなくて井戸端だ。

「君、こゝは井戸端ぢやないか。僕のいふのは便所のことだよ」

といふと、女中は、なアんだといふやうな顔をして、

「それならさうと、早くおつしやればいゝに」

と、あべこべに叱られたといふのである。

上品といふことゝ關聯して、言葉はなるべく丁寧でありたい。對者の人格を尊敬して、それ相當の敬意を、言葉の上にも、態度の上にも表はすことが必要である。よく電車や自動車の中で、七錢か十錢の切符代に、五圓、十圓の紙幣をつきつけて、

「おい、車掌！　切符！」

などと、どなりつける人がある。いくら職掌柄とはいへ、車掌だつてい、氣持はすまい。

その場合、

「車掌さん、切符下さい」

といつたからとて、別にその人の估券が下がるわけでもあるまい。こちらで丁寧な言葉をつかへば、相手も自然丁寧な言葉で應對する。これが人情だ。

道を尋ねるにしても、

「坂下町はどつちかね？」

と横柄にきかれると、知つてゐても、敎へてやりたくないやうな氣がする。

「一寸お尋ねしますが、坂下町へはどの道をまゐつたらよろしうございませうか？」

と丁寧に聞かれると、わざ〳〵廻り道をしても深切に敎へてやりたくなる。

尤もそれとても程度問題で、丁寧も度が過ぎると無禮になつて、却つて對者に不快な念を抱かせるやうなことがないでもない。言葉は丁寧がいゝといつて、

「お宅様では、皆様、おかはりもございませぬでございますか」

といふやうな、まはりくどい言ひ方をしたら笑はれる。同じく對手に敬意を拂ふにしても、敬語の選擇を誤ると却つて滑稽に聞える。おかみさんと呼ぶよりも、奥様といつた方が鄭重だと考へて、裏長屋のかみさんをつかまへて、奥様と呼んだらどうだらう。

「人を馬鹿にしなさんな」とたんかをきられる事請合ひだ。「先生といはれる程の馬鹿でなし」といふ言葉があるが、先生といふ尊稱も、使ひ方を間違へると、對手を馬鹿者扱ひすることになる。鄭重も、敬語も、對手相當といふ事を忘れてはならぬ。

七、言葉と表情

言葉は大切である。言葉の使ひ方一つで、對手に快感を與へることもあれば、その反對に、對手を怒らせることもある。それが文字で表せば、全然同じ言葉であつても、對手に與へる感じは必ずしも同一でないから不思議である。

「御機嫌は如何でございますか」といふ單なる挨拶でも、甲の口から出た場合と、乙の口から出た場合とでは、對手に與へる響がまるでちがふ事がある。

何故だらうか。

それは、言葉には必ずその人の氣持があらはれるからで、言葉が同じであつても、氣持は人々によつて違ふからだ。誰か、友人がうまく就職戰に榮冠を得たとする。

「やあ、お目出度う」

友人達はみんな同じやうな祝辭を浴びせたとしても、心から友の成功を祈つてゐた人と、他人の事なんかちつとも氣にかけてゐない人とでは、喜びの程度、氣持が違ふ。まして、內心失敗を望んでゐた人に於いてをやだ。第一、響き方が違ふ。その言葉には溫味といふものがない。心と言葉とがまるで別の方向に動いてゐるのだ。どんなに美辭麗句をならべても、氣分がそれに伴はない時には、その言葉には對手を動かすだけの力がない。心からの喜びが、そのまゝ言葉となつて表はれる時に、言葉は初めて生きて働くのである。

氣分は顏の異るやうに、萬人悉く同じではないが、大體快活な、明るい人と、どちらかといへば陰氣な、暗い人とに分けることが出來る。生れつき快活な人は得である。自分が愉快であるばかりでなく、接する人をみんな愉快にしてしまふ。こんな人の言葉をきくと、何となく氣が浮き立つて來る。

氣分がそのまゝ顏面に表れる。之を表情といふ。愉快な、明るい氣分の人は、自然と表情も明るい。言葉も、表情も、ともに氣分の反映だからである。言葉は對者の耳に響き、表情は對手の目に映ずる。この耳に響くところの言葉と、目に映ずるところの表情と一しよになつて、對手の心に、或はよい感じを與へ、或は惡い感じを與へる。「目は口程に物をいひ」といふ言葉があるが、表情は、時に言葉以上に、其の人の意志を表現する事がある。此の意味に於いて、表情は、言葉の最も大いなる補助者だといへる。

吾々が常に明るい顏で、始終笑ひながら人と應對することが出來れば、その座談は、最早半分成功したも同樣である。

明るい笑顏

地方の或中等學校の先生に、一人、非常に明るい性格の人がゐたが、この先生の怒つた顏、心配

さうな顏を、生徒は一度も見たことがない。長いこと舍監をしてをられたが、多數の寄宿生の中には不平家もあつて、時々先生のところへ押しかけて行つたものだが、その都度先生は、にこやかに、

「やあ、よく來た。さあこつちへ入りたまへ」と手招ぎされる。椅子をすゝめられる。先生の笑顏を見ただけで、生徒の不平はすつかりどつかへ飛んで行つてしまつて、談笑二三十分、何のために來たのやら分らないやうな顏をして出て來るのが常であつた。つまりどんな不平も不滿も、先生の笑には勝つことが出來なかつたのだ。

しかも其の笑は、決して無理な作り笑ではない。その先生の快活な氣分から、自然に湧き出てくる笑である。笑は無心であればある程、人に快感を與へるものである。わざとらしい作り笑は、却つて、人に嫌惡の念を起させるばかりだ。幇間のへつらひ笑がその適例である。あどけない幼兒の微笑には、極惡非道の强盜さへ、心を打たれるといふ。それは、幼兒には全く邪念といふものがないからだ。こゝで一つ笑つて見せて、小母さんの御機嫌をとつて、何か御馳走にありつかうなどといふ、さもしい了見は微塵もない、心からの笑ひが幼兒のそれである。

明るい氣分、明るい表情は、男にも無論必要だが、殊に婦人には一層必要である。婦人の美しい微笑こそ、平和の表現ともいふべきものだ。支那の褒姒は一笑十八ケ國を傾けたといふが、婦人の

笑顏、笑ひの表情には、實に驚くべき力がある。俗に愛嬌があるといふのは、明るい表情に富んでゐる人のことだが、かういふ婦人が家庭の中心になつてゐると、家の中まで明るくなり、皆が樂しい愉快な日を送る事ができるし、こんな女が店に坐つてゐると、きつと其の店は繁昌する。人間といふものは妙なもので、煙草を一つ買ふのにも、愛想のいゝ店から買ひたい。別に煙草の値段や品質に變りはないけれども、ならう事なら、

「毎度、ありがたうございます」

といふ挨拶だけでも、愛嬌のある人の口から聞きたいが人情だ。商賣繁昌の秘訣は、こんな一寸した所にもあるから面白い。かうした商賣上の呼吸は、支那人の方が遙かに日本人より上手である。滿洲あたりに行つて見ても、日本商店と支那商店とで買ひくらべてみると、同じ品物でも支那商人の方が一二割方安い上に、主人も番頭も始終ニコ〳〵客に接して居る。何も買はずに店を出て行かうとしても、決していやな顏をしない。一視平等に「ありがたう」と愛想をいふ。日本人だとさうは行かない。あれこれと商品をかきまはした末、そのまゝ買はずに出て行かうものなら、「何だ、買ひもしないくせに」といふ心持があり〳〵と主人や番頭の顏にあらはれる。近頃內地の一流百貨店あたりでは、此の點が非常によくなつて來た。買つても買はないでも、店員がいやな顏をするや

うな事はめつたにない。お客が百貨店のみに集つて、普通の小賣商店がさびれるやうになつたのは、百貨店にゆきさへすれば、何でも欲しいものが一ケ所で需められるばかりか、概して商品が確實であるといふ理由の外に、買はずに出て來ても、ちつともいやな顏をされないといふ氣樂さがあるためだと思ふ。

好感と惡感

銀行、會社、官廳などに行つて、先づ受附とか案内係とかに會つたとする。その人達が明るいニコ〳〵した顏で應接してくれると、お客は直ぐになじんで了ふ。遠慮なく何でも尋ねることが出來て、一種の親しみさへ感ずる。さう考へて來ると。玄關をあづかる受附の役目はなか〳〵大切だといふ事が分る。

警察署の人事相談係の如きも、何より先づ明るい表情で人に接し得るといふことを第一の條件として採用して欲しいと思ふ、日本では受附といへば、官廳でも諸會社でも、大抵は下級官吏、下級社員に受持たせる事になつて居るが、これは考物だ。役人などは下級ほど威ばりたがるからだ。

處が米國あたりの第一流會社では、重役級の人が受附をやる。その人は會社全體の事に參與して居るから、何でも知つて居る。來訪者から用向をきいて、どうぞA課の誰々にお會ひ下さい。B課の誰々にお會ひ下さいと指名して、給仕に案内させるから、仕事の能率がズン〳〵あがる。日本でも是非さうありたいと思ふ。

明るい表情は、座談を成功せしめる鍵だといつた。その通りだ。昔の人も「笑ふ門には福來る」といつて居る。誰しも、陰氣な怒つた顏よりも、陽氣なニコ〳〵した顏を好くのは當然だ。といつて、朝から晩まで、ゲラ〳〵笑つてばかりをれといふのぢやない。一言いつては笑ひ、二言言つては笑ふ、始めから終まで、笑の連發でも困る。あれは馬鹿笑ひと言ふものだ。殊に、對者が何か不幸か憂へ事があつて、其の相談に見えたやうな場合、こちらがゲラ〳〵笑つてばかりゐたら短氣な人はきつと腹を立てる。「何をゲラ〳〵笑ふんだ。氣をつけろ」と怒るに違ひない。そんな時には、よく對手の氣持を察して、時には一しよに泣く位の誠意と同情がなければならない。誠意のない空世辭や、同情のない空涙は、大禁物だ。對手の心をうるほすだけの力がないからだ。

八、座談と人格

座談は、決して口先だけの藝當ではない。口の先で、どんなにお上手をいつても、心の中に、反對の氣分を抱いてゐるとしたら、一時は對手をごまかすことが出來ても、いつかは箔のはげるものである。「つけ燒刄は直きにはげる」といふ諺の通りである。たとへ口下手でも、心から出た誠の言葉なら、きつと人の心に何物かを與へるに違ひない。結局は人格をいふのだ。繪畫や、彫刻や、文章でも同じ事である。魂を打ちこんだ作品には誰しも心を打たれるものだ。其の蔭にひそんでゐる人格の力である。座談ではそれが一層明白にあらはれる。不用意の一言一句にも、その人の人格がハツキリと出て來るものだ。どんなに自分の缺點を押しかくし、自分を偉いものに見せようとつとめても、人格の下劣な人は直ぐに化けの皮があらはれてしまふ。尻尾を出してしまふ。この意味に於て座談は、人格のレツテルであるといふことが出來る。

入學試驗、人物採用の口頭試問は、一つの人物試驗、人格の檢査である。僅か二三分の間にその

人の有する知識の全部を知ることは困難だが、此の人は中々しつかりしてゐるなとか、人間がおつちよこちよいだなといふ位の事は、一寸あへば直ぐ分るものだ。學校の成績はどんなに立派でも人格のメンタルテストに落第したらおしまひだ。試驗の答案が皆出來たからといつて、必ずパスする と思つたら間違ひだ。尋ねられた事の半分も答へられなくとも、立派に合格することがある。人格の力だ。此の場合一番いけないのは口先きでごまかさうとすることだ。知らないくせに知つたふりをしたり、分りきつた嘘をついたり、見えすいたお世辭を言つたり、自分で自分の人格の下劣なることを告白して居るやうなもので、決して試驗官の心證をよくする所以ではない。正直に、明白に知つて居る事は知つて居る、知らぬ事は知らぬと答へられるのが最上の道だ。當然知つて居るべき事を知らないのは恥だが、知らずともいゝ事を知らぬと答へるのは恥ではない。試驗官を顰蹙せしめるのは寧ろ智慧者ぶつたり、學者ぶつたりする事だ。

東京驛から神戸行二等車中の出來事である。某氏の直ぐ隣席に一人の若い紳士と其の連れの藝者らしい女とが乘つて居た。何かの話から、女が、

「あなた下關においでになつたことがありますか」

と紳士に尋ねると、紳士は、フンと鼻の先で笑つて、

「下關位知らないでどうするかね」

如何にも馬鹿にしたやうな返事だ。

「ぢや函館は？」

「函館？　知つてるとも！　下關のすぐ先きぢやないか」

某氏は危くふき出すところだつた。この年若き紳士は、その實下關も函館も知らなかつたのである。それをさも知つたふりをして連れの藝者に威ばつて見せたのだ。若し相手の藝者がそれと知つたら、定めし苦笑を禁じ得なかつたであらう。「ヨタも大がいにしろ」と、某氏は心の中で憫笑したといふことだ。座談ではないが、數年前から滿洲浪人某といふふれこみで、各地の中小學校で滿蒙の話をして歩く男があつた。風采が如何にも滿洲浪人らしいし、話もなかなかうまいが、どうも腑に落ちない所がある。「こいつ、くはせ者ぢやないかな」と思つて居ると、果してさうだつた。間もなく新聞の地方通信欄で、其の男が東北の或る町で講演中、まんまと化の皮をはがれて警察にあげられたといふ記事が報道された。それによると、その男は滿洲どころか、朝鮮にも渡つたことのない大ぼら吹きであつた。少し口がまはる處から、新聞や雜誌から得た知識を種に、巧みに滿蒙視察談をでつちあげ、それを一枚看板に學校長を煙にまいて、酒食の糧をまきあげて居たのである。

併しどんなに上手に話しても、嘘はどこまでも嘘である。嘘の皮はいつかは剝げる。ばかなまねはしないものである。

九、座談と勇氣

人一倍口の達者なくせに、目上の人の前に出るか、改まつた席に顏を出すと、まるで別人のやうに、口が利けなくなる人がある。何故だらう。それはその人に勇氣が足りないからだ、度胸が据つてゐないからだ。

座談位何だと馬鹿にしてはいけない。大切な座談には、勇氣がいる。膽略がいる。志氣の沮喪した軍隊は、どんなに軍略をめぐらしても戰場の勝利者となることが出來ないと同樣に、他人の前でガタ〳〵震へるやうな小心者は、到底座談の成功者となることが出來ない。

少々口下手であつても、是非ともこの問題を解決しなければならぬ。この願ひはきいて貰はねばならぬといふ意氣込みがあつたら、しぜん言葉や態度にそれがあらはれる、對手は先づその意氣に

打たれる。場合によれば對手を呑んでかゝる必要もあらう。座談の秘訣は口先きではない、腹だ。

例を勝海舟にとる。當時幕臣中にも海舟の反對者が可なり多かつた。中にはあいつは姦物だ、あいつは賣國奴だ、軍陣の血祭りに、まづ海舟の首を斬れなんて騒ぎたてる過激派もあつた。或日、それ等の悲憤慷慨の壯士數名が、海舟の邸に押しかけて面會を求めた。いふまでもなく彼等は主戰論者であつた。江戸城明渡し反對の急先鋒であつた。彼等は直接海舟に會つて徳川家萬年の爲に彼の軟論を論駁し、もし肯ぜずば刺違へて死ぬ覺悟で來たのである。怒氣滿々、まるで眼の色からして變つて居た。取次の者が驚いて、この由を海舟に告げると、食事中の海舟は平然として、

「さうか、應接所へ通してまたして置け」

と命じて悠々食事をすまし、もの〻一時間もほつたらかして置いて、頃合を見てツカ〳〵と應接所にあらはれ、壯士達がまだ口を開かない中に、

「お前達は家を出る前に鏡を見て來たかな」

とたづねた。あまり思ひがけない質問なので、壯士達も面喰つたが、弱味を見せてはと肩臂怒らし、

「鏡なんぞ見て來ない。そんなものを見てどうするのだ？」

と答へると、海舟はいきなり、破鐘のやうな聲で呶鳴りつけた。

「馬鹿！　家に歸つて鏡を見て來い！　皆眞蒼な顏をして一人だつて血の氣のあるやつは無いぢやないか、皆ガタ〳〵ふるへてるぢやないか、そんな度胸の据らぬヒヨロ〳〵武士に何が出來るか、何が役に立つか。さつさと歸れ！」

いはゆる青天の霹靂だ。威猛高に叱り飛ばした海舟の氣勢に呑まれて、壯士達はグウの音も出なくなつた。先程の氣勢はどこへやら、いつの間にか一人たち二人たちしてすご〳〵と逃げるが如く立去つた。但しこんな藝當は、命を捨てゝかゝつた人でなければ出來るものではない。凡人がうつかり眞似たらどんな目にあはうも知れぬ。由來、生兵法は大怪我のもと、注意が肝要だ。

江戸城の受渡しで勝海舟と大芝居を打つた西郷南洲。あの人なども適例だ。維新當時の日本は、僅かに文明國の仲間入りをしたといふだけ、まだよち〳〵歩きの赤坊も同樣であつたから、外交上に於ては、常に列國のため弄せらるといふ有樣であつた。殊に英國公使パークスといふ男は、頗る傲慢不遜の曲者で、何か面倒な問題が起ると、

「佛國公使と相談の上お答へ致さう」

と巧みに逃げをうつては、時の外務卿寺島宗則を苦しめたものである。

そこで寺島外務卿は、何とかうまい方法があるまいかと西鄕南洲に相談を持ちかけた。南洲はだまつてきいて居たが、

「よろしい。おいどん、一つパークス公使に當つて見ませう」

といつて、即日、パークス公使を訪問した。パークスは例の通り、どこを風が吹くといふ樣な顏をして南洲に面接した。

「時に」

と南洲は口をきつた。

「甚だ突然の質問で、御無禮はおわび申すが、一體貴國は佛蘭西の屬國でありますか」

如何にも人を食つた質問である。パークスは、烈火の如く怒つた。彼は滿面に朱を注いで、

「おだまりなさい。苟も日本の陸軍大將ともあらう貴方が、英國が佛蘭西の屬國であるか、ないか位は、十分承知して居られる筈である、英國は世界最强の立憲國、佛蘭西の如き、出來たての共和國と同日に論ずべきではありませぬ」

二言といはゞ拳も振り上げかねまじき程の劍幕でかう答へた。これには西鄕も辟易するかと思ひの外、顏色一つかへぬ南洲は相變らず落ち着き拂つて、

「いや、私もかねがね英吉利は、立派な獨立國だと思つてをりましたが、近頃どうも解せぬことがありまするでな」

「それは何事です」

と言つたパークスの顏には青筋がピク〳〵と動いた。

「いや外でもありませぬが、貴方が我が政府と國際上の問題を議するに當つて二言目には、佛國公使に相談してから、佛蘭西公使に相談してからとおつしやるが、英吉利が本當の獨立國なら、何も一々佛國の鼻息を伺はれる必要はない筈、それにも拘らず何か事が起ると、貴方は佛蘭西の指圖を受けなければ御返事が出來ないやうな御口吻は心外に存じ申す。ことによると最近貴國は佛國の屬國になつたのではないかと考へましたので、今日態と伺ひにまゐつたわけです」

流石のパークスも、これにはギヤフンと參つて、グウの音も出なかつたといふ。當時、世界の最强國といはれた英國の公使を、まるで子供かなんぞのやうに扱つて、外交の難局を救つた南洲の豪膽さには、今更ながら驚かざるを得ないではないか。

座談には勇氣が要るといふのはそこである。親しい友人同志の懇談や漫談なら、誰れでも出來ようが、相手が未知の人であり、どんな性格の人だか、どんな意見を持つて居る人だか、さつぱり見當がつかないやうな場合には、誰だつてさう簡單に口を開くわけにはゆかぬ。うつかり口をきいて、どんなしつぺい返しを食ふかも知れないからである。時には相手が自分に敵意を持つて、頭から反對の意志を表明するやうな場合、威嚇的脅迫的の態度でつつかゝつて來るやうな場合がないとも限らない。もしそんな時に、ヘドモドして自分の正しい意見も十分發表することが出來ず、尻尾をまいて引き下つて來るやうでは、到底今日の如き激烈なる競爭場裡に馳驅して頭角をあらはすわけにはゆかないからだ。

保險勸誘のこつ

或る保險會社の重役に、保險勸誘のこつは何かときいたら、

「こつもなにもないが、保險勸誘員の第一の資格は、勇氣と忍耐だよ」

と答へたといふ、極めて平凡な答へではあるが、この言葉には確かに一つの眞理が含まれてゐると

思ふ。生命にしろ火災にしろ、保險の勸誘に出かけるのは、決して惡い事を勸めに行くのではない。否、其の人の老後の爲、萬一不幸に遭遇した場合にあわてないやうに、轉ばぬ先の杖ともなれかしとの親切心も多分に手傳つて居るのであるが、世間の人は妙に此の保險勸誘員を毛嫌ひして一度や二度で快く引見してくれる人は百人に一人もない。忙しくて會へないならまだしも、中には居留守を使ふ人がある。勸誘員がそれで氣勢をくじかれてしまつては何にもならぬ。もう一息勇を鼓して順々と說きすゝめる覺悟が肝心だ。勇氣と忍耐の必要はそこにあるのだ。

時には奧さんやおかみさんから侮辱的な言葉を聞かされる事もあらう。てんから鼻あしらひをされる事もあらう。その時が勸誘員にとりて一番大切な時だ。最も忍耐を要する時だ。先方がどんな風に出て來ようが、こちらはあくまで柳に風と受け流して、潮時をまつのだ。秀吉と家康の杜鵑問答、秀吉のやうにのつけから「啼かして見せるほととぎす」では十中の八九は、失敗する。家康の「啼くまでまたうほととぎす」でなくては、十分の成功は收められぬ。それがむづかしいのだ。異常の勇氣と、異常の忍耐、それなくして保險の勸誘は不可能だ。但し勇氣といふのは、徒らに虛勢を張ることではない。偉さうに見せかけることでもない。虎の威を借る狐のやうに威張ることでは勿論ない。喧嘩腰で座談をすることが勇氣だと考へたら、飛んでもない間違ひだ。海舟や南洲の

形だけ眞似たところで腹が据つてゐなくては、却つて對者に見すかされて笑ひ者になるだけだ。眞實腹から出た勇氣でなければ役立たない。外に現はれた言葉や、態度がどんなに柔かでも、腹の底にしつかりしたところがあれば、對者に乘ぜられる處れはない。

女教員の機轉

或地方の小學校に奉職して居る、一女教師の實話である。獨身の彼女は學校から程遠からぬ農家の離座敷を借りて自炊をしてゐた。ところが同村は昔から非常に風儀の惡い土地で、村の青年たちは、夜分になると、若い娘のゐる家へ忍んで行つたり、泊りに行つたりする。村人もそれをあたりまへの事だと思つて居る風があつた。若い新任の女教師が、彼等不良の徒の目ざすところとなつたのはいふまでもない。

或晩、女教師が床をしいて寢まうとして居る處へ、二三人の若者がいきなり飛び込んで來た。勿論彼等も先生といふ身分に對して、多少は遠慮したらしく、最初はもぢ〳〵してゐたが、一人の青年が、

「一寸用事があつて來ましたよ」

といひながら、座敷に上つて來た。あとの青年もぞろ〳〵と上つて來た。

女教師はハッと思つた。何しろ寢衣姿である。生徒なら叱りつけもできようが、相手が村の青年である。うつかりした事を言つて、彼等の感情を害しては、とりかへしがつかぬと考へた彼女は、突嗟の間に覺悟をきめて、

「あゝさうですか、一寸失禮します」

といひながらのべてあつた蒲團をたゝんで、押入に片付け、手早く寢衣の上に通學用の着物を着て、袴をつけ、若者たちの前にピッタリと坐つて、鄭重に疊の上に手をついて、

「まア〳〵この夜更けにわざ〳〵お出で下さいまして恐れ入ります。どんな御用でせうか、どうぞおつしやつて下さい」

と慇懃な挨拶をした。言葉はやさしいが、その顏、その態度には乘ずべき一點のすきもない。村の青年達は度膽を抜かれた。互に顏を見合せてもぢ〳〵してゐたが、

「いえ、何、今夜でなくてもいゝです。いづれ明日改めて……」とか何とかいひながら、さも氣まり惡さうに、一人たち二人たちして、こそ〳〵と歸つて行つた。相手はかよわい女である。暴力に

訴へようと思へばどんな事でもできる筈だ。それにも拘らずおめ〳〵と引きさがつたのは、彼女の勇氣にのまれたのである。變に處して動ぜざる膽略に制せられたのである。單なる言葉の力では無論ない、非常時に於ける座談の心得として、最も極端なる其の一例として特記した次第である。

當つて碎けろ

いやな人、嫌ひな人と語るのは誰しも苦痛である。虫が好かぬ人は世間にいくらもあらう。そんな人と話し合ふことは決して愉快な事ではないが、さう〳〵好きな人、氣の合つた人とばかり話しあへるものではない。用件によつては、隨分いやな人、虫の好かぬ人にもぶつからねばならぬ場合がある。そんな時には一層勇氣が必要だ。臆病な者にはそれが出來ない。會つた時にいやな奴だなと思つても、話し合つて見ると案外だつた例はいくらもあるものだ。そんな場合、勇氣を起して先方にぶつかつて行く事も一方法だ。古語にも當つて碎けろといふのがある。

S氏の友人が小學校の教職について居た頃の話である。學務委員の中に一人非常にむづかしい男があつて、時々學校にやつて來ては、「いや、子供の行儀が惡くなつた」とか「先生の退出が早過ぎ

る」とか、

いろんな小言をいふ。まるで監督官のやうなつもりで、ガミ〳〵いふのだから、やりきれない。職員一同、癪にさはつてたまらないが、何といつても町内の有力者だ。「長いものにはまかれろ」だ。「さはらぬ神に祟りなし」といふ諺もある。校長はその都度、留守を使つたり、用事にかこつけたりして、逃げまはつてゐる。他の職員も勿論面會を避ける。結局白羽の矢を立てられたのはS氏の友人だ。

「一つ君會つて話してくれたまへ」

校長からかういはれると、いやともいへない。

「いくらむづかしいといつたつて、狂人ではないのだらう、まさか頭から嚙みつかれる心配はあるまい」とたかをくゝつて、待たせておいた應接室の扉をあけると、學務委員はジロリと見て、

「校長はどうした？」と、もう小言の皮切だ。

「校長は只今一寸手の離せぬ用事がありますので、私が代つてお目にかゝります」

「君には用はない、校長を呼んで來たまへ」

そろ〳〵危くなつて來た。

「御用事は學校の事に關してでございませうか、それとも校長一個人の問題でせうか」

「勿論、學校のことだ」

「それなら私も職員の一人であります。皆さんの大切なお子さんをお預りしてゐる身でありますから、非常な重大事件に非ざる限り、大抵の事なら辯じ得る積りです。是非お話を承りませう」

「君ではよく話が分らんのだ」

てんで相手にもしない劍幕だ。友人は考へた。こゝで負けたらおしまひだ。もう一度ぶつかつてやれと思つて、

「お言葉ですが、あなたのお話が分らん位の私に、大切な教育を任せられるといふ筈はないと思ひます。校長が差支へある時に、その代理が勤まらぬやうな職員は無用の長物です。そんな職員を置くといふ事が、第一、學校として非常な不經濟、それこそ大問題であらうと思ひますが、如何でせう」

思ひきつて高飛車に出て見ると、先方もまんざら馬鹿ではないから、急に態度を柔げて、

「いや分つたよ〳〵。ちや君に話して置かう」

と前置きして、物々しく話し出したのが何かと思つたら、相變らずくだらない小言の數々、

「ちや君からようく校長に傳へてくれたまへ」

といつて、さつさと歸つてしまつたが、數日後に又やつて來た。この時もS氏の友人が相手を仰せつかつた。その次も、その次も、來るたびに應接するのはその友人だ。幾度も〳〵話し合つてゐる中に、だん〳〵其の男の氣心も知れて來る。今までいやな奴だ、うるさい男だと一圖に毛ぎらひしたのがばか〳〵しくなつて來た。向ふでもさうらしく、五六回目からは、特にその友人を名指して會ひたいといつて來るやうになつた。

かうなればもうしめたものだ。嫌な男どころか、四五日も顏を見せないと、どうしたらうかと心配するやうになつた。「虎穴に入らずんば虎兒を得ずですね」といつて、友人は呵々大笑した。

そこに來ると、氣の弱い人、勇氣のない人は、今一息といふところで腰が折れる。その爲めに折角の機會も取り逃してしまふ例はいくらもある。

こんな事を話したら、相手はきつといやな顏をするに違ひないと思ふやうな場合には、誰しも臆し勝ちになるものである。この時にこそ勇氣が要るのだ。自分の意志を十分に強く表示して、あくまでも對手の心に訴へようといふ押しの力が、案外座談を成功させるものである。

十、座談の呼吸

前項に於いて、勇氣は座談を成功に導く大きな力であるといつた。しかし其の意味を取りちがへて、勇氣と向ふ見ずの無鐵砲とを一しよくたに考へてはいけない。況んや厚顏無恥と同一視するに於てをやだ。

世の中には隨分話ずきな人があつて、人柄も場所柄も考へずに、どんな問題に對しても直ぐに横から口を出す人がある。俗にこれを「出しやばり」といふ。これは勇氣の部には入らない。

座談の眞の勇者は、語るべき時には千言萬言を惜しまない代りに、語るべからざる時には一語も發しない。沈默は金なりといふ格言はこんな場合にこそピタリとあてはまると思ふ。

或る人は曰く、當世は「押し」の世の中だ。何でも押しの強い者でなければ成功しない。座談もその通りだ。一、押し、二、押し、三、押しで、押しで進むに限る。云々。一面の眞理はあるが、座談がいつも押しの一手でのみ成功すると思つたら間違ひだ。時にはあつさりと話を打ち切つた方

が、より有利に展開する場合もあるからだ。

勇氣と執拗とは違ふ。「押し」は時として一脈相通ずるものがあるからである。何とことわつてもどんなにおどかしても、梃でも動かぬ行商人なども其の一例で、孤兒院や自稱癈兵の用ゐる戰法は、却つて相手の同情を失ひ、反感を買ふ結果になり易い。

もう一つ東京でうるさいのは、新聞や牛乳の押賣だ。

「××新聞ですが、今日から是非御愛讀を願ひます」

といつて、賴みもしないのに見本紙を五日も十日も入れてゆく。

「うちでは他の新聞をとつて居るから不要です」

と幾度斷つても承知しない。しまひには、

「一ケ月でよろしいからとつて下さい」

と嘆願し、懇願する。こゝまではまだ辛抱出來るが、より以上執拗くされると、つい癇癪玉が破裂する。さうなると意地にもとる氣になれなくなる。

「いらないよ」

「どうしてもですか」

押問答の末、結局、憎々しい捨科白を殘して立去つてしまふ。「押し戰術」の最惡なるものである。

處が同じく新聞の勸誘でも、賢明なる配達人は、決してそんなヘマな眞似をしない。

「××新聞をとつていたゞけませんか」

と申入れて、先方が同じやうな理由でことわると、

「さうですか。では又何かの機會に、その新聞をおやめになつた時に、××新聞をおとり下さるやうお願ひします。失禮いたしました」

と鄭重に賴んで、そのまゝ引き上げて行く。かうされると、勸誘された方でも決していやな氣持がしない。その後二三度足を運んで來るうちに、つい氣の毒になつて、自分から進んで購讀の申込みをするといふ事になる。

上手な懸引

日常の座談でもその通りだ。突進主義ばかりではいけない。臨機應變、時には急がず、あせらず、漸進主義で進む。時と場合によつては豫定の退却も必要であらうし、柔を以て剛を制するの作戰もとらねばならぬ。自分の意志をどこまでも强く鮮明に對手の胸に印象づけることが有利な場合もあれば、自分の心を容易に對手にさとられまいため、わざと要領を得ない話をすることが得策である場合もあらう。それが座談の呼吸である。大切な懸引である。懸引といふといやに聞えるかも知れぬが、こゝにいふ懸引は決してさういふ下品な意味ではない。

ユーゴーの名著「レ・ミゼラブル」の中に、こんな一節がある。モンフエルメイユの軍曹旅館に、コゼットといふ八歳の娘がゐた。これは主人夫婦の實子ではなく、或る女工の私生子を預かつたのだが、夫婦はこの小娘を牛馬のやうに驅使し、虐待する。ジヤンバルヂヤンは、コゼットの母が死ぬ前に書いた委任狀を持つて、コゼットを引取るために、自身でモンフエルメイユに出かけて來たのである。それは丁度クリスマスの夜であつた。コゼットが宿屋の主婦に命ぜられて、淋しい崖下まで水を汲みに行つたが、桶の重さに堪へかねて、その場に打倒れた。疲勞と困憊の極、コゼットは起きあがる勇氣なく、冷めたい地上に跪いたまゝ、泣いて神樣にお祈りして居たが、やがてまたヨロ〳〵とたちあがつて、二三歩あるき出した時、そつと後からコゼットの持つて居る水桶に手をかけたのがジヤンバルヂヤンであつた。

「娘さん、心配する事はない。私に任せておきなさい」

かういひ慰めたジャンバルヂャンは、コゼットに案内されて軍曹旅館に一泊したが、コゼット引取の用件については、一言も話し出さなかつたのである。最初このみすぼらしい主人のテナルデー夫婦は、老人に對して、何の好意も期待も持たなかつたが、此の老人がコゼットの爲めに高價の人形やいろんな物を買つてくれたときいて、少からず度膽をぬかれた夫婦は、羨望と嫉妬のために、コゼットに對する憎しみの念は一層強くなつたのである。

夜が明けた。老人は荷物と一本の杖をさげて寢室から出て來た。早立ちをしようといふのである。主婦が帳場から顔を出して、

「まあ、こんなに早く……もう、おたちですか」

「ハイ。お世話になりました。勘定書を下さい」

老人はコゼットを引取るためにわざ〳〵やつて來た事などは、まるで忘れたかのやうである。勘定書が示された。三十二法といふ法外な請求である。老人はそれを聞きもせず、

「おかみさん、どうです。この頃の景氣は」

と何氣ない樣子で尋ねた。主婦は泣言をならべることには慣れてゐる。

「この頃のやうに不景氣なことはありませんよ。何しろ家族は多いし、それにコゼットのやうな厄

介者までをりますから」

老人はコゼットの事なんかまるで忘れてゐたかのやうに、

「エ、、コゼットとは？」

「そら昨夜あなたが、いたはつて下すつたあの小娘ですよ」

「あの子ですか。そんなに厄介なら手離してしまつたら如何です」

「手離すと申しますと」

「私が貰つてあげようぢやないか。そんなに邪魔になるなら」

老人はかういつて、ぢつとかみさんの顔を見つめた。

「ほんとうですか、連れてつて下さいますか」

「え〻連れてつてあげませう」

「あの直ぐに？」

「すぐにです。あの子を呼んで下さい」

そこで初めて出された勘定書を見た。老人は、ちよつと意外な顔をしたが、直ぐ思ひかへして、五法の貨幣を七つ、テーブルの上に置いた。

「いや旦那の勘定は二十六スーでいゝんだ」

といひながら、そこへヒョツコリ顔を出したのは主人のテナルデーだ。彼はずるさうな眼を光らせながら、老人の顔色を見い〳〵、

「いえ何、コゼットを差上げないとは申しませんが、何しろこれまで實の娘同様に可愛がつて育てた娘の事ですからね、お名前もお處も知らぬ見ず知らずの方に、オイソレと差上げるわけには行かないぢやありませんか。上げるにしても、時々は見にも行きたいし、様子も伺ひたいと思ひますんで、お差支なかつたらお名前と、お處を知らしていたゞきたいんで。何なら一寸、旅行券の端でも見せていたゞきませんと……へい」

皮肉たつぷりの言葉のはしはし。無論慾にからんでの言ひがかりである。こゝでたじ〳〵となつたらおしまひだと思つた老人は、つとめて無表情な態度で、默つてきいて居たが、別に顔色もかへず平然として、

「いや、御主人、お言葉は尤もぢやが、巴里から僅か五里か六里の地方へ出て來るのに、旅行券まで用意して來る人がありますかな。私がコゼットを貰はうといふのは、お前さん方がそれ程邪魔になさるなら私が貰つてあげませうといふだけの事、從つて私が貰つた以上、二度とあなた方に會ふ

氣もなければコゼットに會つて貰はうとも思はぬ。名前も住所も申上げぬのはその爲めぢや。つまりこれ限り音信不通といふ約束で呉れるなら貰はうといふまでだ。いやならいや、應なら應と、ハツキリ言つて貰へばそれでいゝのです。嫌ですか、應ですか、くれますか、くれませんか、返事はたつた一言でいゝのです」

何といふ明白ないひ方であらう。テナルデーは全く老人の言葉の威力に壓せられた。これ以上爭ふことは到底出來ぬ。これから一時間とたゝぬ中に、コゼットはジャンバルヂャンに手を引かれ、モンフェルメイユの町を巴里の方さして歩いて行つたのである。

若しジャンバルヂャンが、あの時に一歩、座談の呼吸、談判の懸引を誤つたならば、うまくコゼットを引取ることが出來なかつたかも知れぬ。相手は戰場泥棒までやつた曲者である。一筋縄ではおいそれと、すなほにコゼットを手渡すまいと考へたジャンバルヂャンは、心の中であらゆる秘策をめぐらしてゐたにちがひない。或る時には他人事のやうに、むざうさにいひ出したかと思ふと、或る時には單刀直入、對者の胸に短刀をつきつける縱横の戰術、この一節の會話によりて、吾々は座談の妙味についていろ〳〵な暗示を受けとる事が出來ると思ふ。

要領を得た「不得要領」

不得要領といふ言葉がある。「あの男は何を言つてるのかさつぱり分らない」といふやうな場合、不得要領の言葉が使はれる。處が時と場合によつてそれが却て自己の立場を有利に導く動機となる事が珍らしくない。これは、普通、座談の例としてはどうかと思ふが、西郷從道侯について面白い話がある。侯がかつて海軍大臣として、第一期海軍擴張案を議會に提出した時、國民黨の驍將尾崎咢堂が猛然起つて質問の矢を放つた。

「その擴張案たるや、甚だよし。たゞその大方針は移動防禦にあるか、或は攻擊防禦にあるか。それを大臣に伺ひたい」

侯はおもむろに口を開いて、

「お答へ致します。遠くまゐりますには速力の大なる巡洋艦があります。敵艦近づき來る時には水雷艇があります」

さつぱり要領を得ない答辯である。さすがの咢堂もその意を解するに苦しんだ。そこで再び質問

した。

「國防の方針たるや、進んで彼に當るにあるか、若しくは守つて戰ふにあるかそれをハッキリと伺ひたい」

侯は從容としてこれに答へた。

「戰爭をするには、海に戰鬪艦あり、陸には砲臺があります。又大砲を打つには砲艦があります。さうして敵艦を打ち碎く水雷艇があります」

相變らず何のことだかちつとも要領を得ない答辯である。咢堂、呆然として最早發言の勇氣もない。侯はすかさずまくしたてた。

「御質問があるなら御遠慮なく願ひます。腹藏なくお答へ致しますから」

腹藏なくもないものだ。これでは蒟蒻問答だ。まるでつかみ所がない。あげ足をとらうにも取り場がない。國民黨の猛者も、これにはすつかりまゐつてしまつた。ブツ〳〵言つてる間に擴張案は無事に議會を通過した。——これなどは、全く不得要領が要領を得た一例として面白い話だと思ふ。

糧を敵に借りる

座談の仕方には、一定の公式がない。その度毎に呼吸がちがふのである。對者が自分の話をどんな工合に迎へてくれるか、今、どれほどまで目的を達しかけたか、一層辭を低うしておだやかに對すべきであるか、それとも高飛車に突進すべきであるか、或ひはあつさり中途で打ち切つて、後日の機會を俟つべきであるか、そこを速かに洞察して、その場合々々に適應した戰術をとるのが、最も座談の巧みな人である。

對者の一語も發せぬ前に、既に對者の心を讀んで、それに對する作戰を考へ得たならば、多くを語らずして大きな收穫が得られることであらう。

某大百貨店員の實話である。其の店では客が買物をすると必ず、

「お屆け致しませうか」と丁寧にきくのを慣例としてゐた。すると客の方ではきまつて、「屆けて貰ひませう」と來る。それがため毎日の配達費が非常な多額に上る處から店でも考へた。何かいゝ工夫があるまいかと一同首をひねつた末、試みに、

「お屆けいたしませうか」の代りに、

「お持ち歸りでございますか」と言はせて見ると、大抵の客は言下に、

「エ、」とうなづく。これでその店の配達費が著しく減少したといふ。

「お屆けいたしませうか」

「お持ちかへりでございますか」

どちらも不自然な「伺ひ方」ではない。よしんば客が「えゝ」と答へて、重い品物を自身で持ちかへることになつても、客の方では別に氣を惡くするわけはないのである。

柔道ではよく對者の力を利用して却て對者を倒すことがいくらもある。こんなことは座談にもよくあるものだ。對者の言葉で對者を縛つてしまふのだ。

昔アレキサンダー大王が、斯波遠征の途中小亞細亞のラムプサカスといふ町を過ぎる事になつた。大王は此の町が、かつて自分に對し謀叛を企てたことを思ひ出して、この機會に町を全滅させてやらうと考へ、內意を部下に傳へて置いた。

處が此の町出身の歷史家にアナキシメネスといふ人があつた。大王の父君フイリツプ王の時代から相識の間柄であつたので、何とか王に嘆願して町の滅亡を救ひたいと思ひたち、單身大王の陣營

を訪れた。大王は早くもアナキシメネスの心を讀んで、愁訴でもされては事面倒と、機先を制するつもりで、

「あいや、今日は如何なる御用でも、先生の願は聞き屆けることが出來ませぬ」

とグワンと一本釘をさした。これにはさすがのアナキシメネスも二の句はつげまいと思ひの外、彼はさも〳〵殘念さうに、

「それは困つたことでございます。實は私は大王に、この町を亡ぼしていたゞきたいと思ひまして、其のお願ひに參つたのでございますが、聞き屆けることが出來ぬと仰せらるれば仕方がございません。早速この由を市民に傳へませう」といつて、ズン〳〵歸つてしまつた。

これにはアレキサンダー大王も驚いた。計らう〳〵と思つて、自分が却つて計られた形になつたからである。あの男があゝいつたからには、市民に何かふかい企らみがあるに違ひない。うつかり手を出してつまらぬめにあつてはならぬと考へて、其の儘無事に通過した。おかげでラムプサカス市は、兵火から救はれ、全滅を免れたといふ逸話がある。

十一、皮肉と諷刺

座談は演說のやうに獨白形式の談話ではないから、相手の出樣如何に依つて、直ちに策戰をかへる必要がある事は前述の通りである。その戰法の一つとして、皮肉と諷刺とについて、聊か考へて見たいと思ふ。

皮肉や諷刺は、料理に加味する胡椒や山椒のやうなものだ。あまり多くの量を要しない。「山椒は小粒でピリリと辛い」といふところに價値があるのである。

但し皮肉らんがための皮肉は、吾々の望むところではない。一言の皮肉が力强い諷刺となり、人の肺腑をつくが如き敎訓となつて、對者の心に何物かを與へるやうなものでなくてはならぬ。ただ皮肉をならべて痛快がつてゐるが如きは、座談術の邪道といふものだ。

鹽の味

徳川家康が、群臣の集つた席上で、

「世の中で一番うまいものは何か」

ときいたところが誰も答へるものがなかつた。家康はジロリと座中を見まはして、大久保彦左衛門に目をとめた。

「彦左どうぢや」

「鹽にございまする」

「鹽……？　うーむ、然らば問ふが一番まづいものは何ぢや」

彦左衛門は言下に答へた。

「鹽にございまする」

「さすがは彦左、家康も同感ぢや」

家康は會心の笑をたゝへて、群臣を顧みた。皮肉な彦左衛門の返答が、漸く奢侈に流れんとしつ

つある列席の諸侯の耳に、どんなにビーンと響いたかはいふまでもあるまい。

金持と犬

ある人が佐久間象山を訪ひ、

「先生は宇宙間に何知らぬことなき大學者と承りまする。就ては私一生のお願ひ、金持になる秘法を教へていたゞきたいと思ひますが如何でございませう」

といふと象山は眉一つ動かさず、

「それはいと易き事だ。これからさき、小便をする時に、片脚をあげてなさるがよい。それが金持になる秘法でござる」

「先生、戯れをおつしやつては困ります。それは犬の眞似ではございませんか」

「左樣、金持になるには、先づ犬にならねばならぬ。義理や人情を知つてゐては金持にはなれぬのぢや、ハツ〳〵〳〵〳〵」

といつてカラ〳〵と笑つた。其の人大いに悟る處あり、深く謝して歸つたといふ。

皮肉は決して虚妄の言ではない。その中に必ず眞理を含んでゐなければならぬ。正門から入るべきところを、裏門から入るといふまでのことだ。

「金持になるにはどうしたらよいか」

と問はれた時に、

「それは先づ人情を忘れ義理を捨てなければならぬ」

といへば、それは眞理ではあるが平凡だ。對者の胸を打つ力に乏しい。ところが、

「小便をする時に片脚をあげてなさるがよい」

といはれると、誰だつて先づ其の奇警に驚くに違ひない。そこを狙つて、

「金持になるには犬にならねばならぬ」

ととゞめを刺したところに千鈞の重みがある。對者はその眞理の前に、自ら頭を下げざるを得なくなるからだ。

乃木總督の一言

乃木大將が、臺灣總督時代の逸話である。

當時、土民の多數は、まだ十分日本政府を信賴しない爲めに、紙幣の流通が甚だ不活潑であつた。民政廳では止むを得ず、毎月一二回づつ、日を定めて紙幣と正貨の引換へをする事にして居た。その時には數ケ月前から政廳四ケ所の門前に、來る何月何日、午前何時より何時まで、紙幣と銀貨を引換へる旨を告示して置くのだが、時間の觀念に乏しい土民共は、指定の日、指定の時間に來ないで、とんでもない時にやつて來る。役人が時間外だからいかんとはねつけると、

「民政廳は不親切だ」

と怨言を放つ。それをふと耳にされた乃木總督は、或日係長に向つて、

「紙幣の引換へは圓滿に行はれて居りますか」

と尋ねた。すると係長は、此の時だといはぬばかりに口を尖らせて、

「いやどうも、こゝの土民共と來たら時間の觀念がまるでありませんので、困つて居ります。どい

つも、こいつも、時日を正確に守らない癖に、民政廳は不親切だなどと怨言を吐いて居りますやうなわけで……」

と答へた。總督はだまつて聞いて居られたが、やがて誰にいふともなく、

「此方へは、日本の暦がどれほど行きわたつて居るだらうかな？」

と、ひとり言のやうに強くいつて、係長の顏をじつと見つめられた。——當時はまだ日本暦が十分にゆきわたつて居なかつたので、土民の大部分は清暦を用ゐて居た。それを總督は知つて居られたのである。

「日本暦で告示するのは當然だが、日本暦が十分土民間に行きわたつて居ないとすれば、土民だけを責めるのは無理ぢやないか」といふ意味を、言下に諷されたのであつた。

大王と盜賊

またこんな話がある。

アレキサンダー大王が、捕はれて來た海賊に向つて、

「汝は何故にみだりに海を荒すか」と責めると、海賊は平然として、

「私はたゞ大王のなされるところを眞似たばかりでございます。大王は大艦隊を率ゐて國を相手に思ふ存分にあばれまはらるゝが故に征服者の名を得、私は見るかげもない小船に乘つて、コソ〳〵泥棒を働きましたがため、盜賊の汚名を受けたのでございます」

と答へた。これにはアレキサンダー大王一言もなかつたといふ。

哲學者と富豪

或る西洋の富豪が、哲學者を自邸に招いて、その數寄をこらした室內や庭園を見せびらかした。客室から庭の隅々まで、如何にも善美を盡してゐる。富豪は得意氣に、

「如何でせう。これでも先生のお氣に召さないでございませうか」

といふと、哲學者は何と思つたか、それには一言も答へず、いきなり富豪の顏に痰を吐きかけた。富豪は眞赤になつて怒つた。

「何をなさるんです。人の顏に痰をかけるなんて、あまりではありませんか」

哲學者は落ちつき拂つて答へた。

「いや、邸内を拜見致しましたところ、隅から隅まで結構づくめ、美麗づくめで、痰を吐きたくも吐くところが見當りませぬ。どこが一番汚いかと見まはすうち、やつと見つけたのがあなたのお顏、失禮ながらお顏を汚した次第でございます」

といつて、唖然たる富豪をしり目にかけて、悠々として辭去したのであつた。

皮肉もこゝまで來れば、千萬言を費すよりもピリツと利くにちがひない。よし富豪は忿怒に燃えて、哲學者に對して敵意を抱いたとしても、道理の前には恐らく頭があがらなかつたであらうと思ふ。

石黒忠悳翁の諷刺

こんな話もある。

石黒忠悳翁が軍醫總監時代、某子爵家の次男が徵兵檢査を受ける事になつた、子爵家では、どうかして免役になるやうにと、いろ〳〵心配したあげく、三太夫某が、わざ〳〵翁の許を訪づれ、

「實は手前邸の御次男樣が、今年適齡で、徵兵檢査をお受けになりますので、どうか閣下の御盡力で、そこのところを何とかよろしくお取計ひ願ひたく、まかり出でました」

といつて、持參の鰹節の包をおそる〳〵翁の前に差出した。翁は、

「ふゝむ」

とうなづいたので、三太夫はほつとして、

「では御承知願へませうか」

といふと、石黒翁はパツと眼を開いて、

「いや、華冑の身を以て國家のために一兵卒としてお盡しにならうといふお志、まことに敬服いたしました。體格の如何できまるので、採否の權は一切檢査官にありますから、お請合ひは出來ないが、折角のお賴み故、拙者も成可く御合格になるやう御盡力致しませう」

その時三太夫がどんな顏をしたかは聞き落したが、一寸聞くと何の變哲もなささうなその應答には、實にメスのやうな鋭い皮肉と、諷刺とがこもつてゐるのである。三太夫の「お願ひ」は合格しないやうに盡力してほしいといふのである。石黒翁は、それを千も萬も承知である。承知の上で逆手を以て、此の不心得な華族の三太夫をギウとやりこめたのである。もしその場合、「いや、國民と

して兵役をのがれようなどとは不心得千萬、あんたにしても、國家のために御次男様の合格を祈られるのが當然ではござらぬか」

かう眞正面から叱りつけたとしたらどうだらう。

「それは承知してをりまするが、何分大切な御次男様、そこを何分どうぞ」

と拜み倒しにかゝるに違ひない。さうなるとちよつと説諭に手間がかゝるので、まんまと裏をかいて對者の志を賞しつゝ、陰に鋭くその不心得を戒めた處に無限の味ひがあるのだ。かうほめられては、いかな三太夫でも、

「いえ、あの、それではお話がちがひます」

とはいひ兼ねる。翁の一言は、對者に強い自責の念を起さしめると同時に、先輩としての職責を全うしたものである。

濫用は禁物

皮肉には、多くの場合、どこかにその人の機智の閃きがあらはれるものだが、しかし時には平々

凡々の言葉も、對者にとつて痛い皮肉となり、對者の胸に強く止めを刺すやうなことはいくらもある。

東京に出て一寸成功した男、錦を飾つて故郷に歸つたのが田植時、田五作共に自分の威勢を見せるつもりで、車上から、

「おい〳〵、それは何といふ草かね」

と問ひかけた。勿論彼とても稲の苗を知らぬ筈はないが、自分の都會人たることを誇りたいばつかりに、こんな愚問を發したのである。すると一人の百姓が大聲で呶鳴つた。

「おゝ、お前太郎兵衛の家の伜ぢやないか。現にお前の兩親も、此の草を植ゑてゐる筈だ。兩親に會つて聞くがいゝや」

男は此の一言でペシャンコになつた。何の奇もない、雑言ではあるが、對者にはどんなに皮肉にきこえたであらう。恐らく其の男の耳には、その邊にゐる人々が口を揃へて、

「少し位成功したからとて、そんな横柄な面をするものではない。昔を忘れた大馬鹿奴が」

と、罵つて居る程に感じたに違ひない。

皮肉は時と場合によつて必要でもあり効果もあるが、決して濫用してはならぬ。濫用すれば却つ

てその偉力を失ふばかりか、人々からは「あんな皮肉な奴はない」と毛嫌ひされる虞れがあるから。皮肉はどこまでも頓服藥であつて常服藥ではないからである。いくら胡椒が好きだからといつて胡椒を常食にする人がないのと同じ事だ。

十二、比喩と例話

釋迦が、或る時弟子の阿難を連れて町に托鉢に出かけた。ところが此の町には、釋迦の敎に反對する人々が澤山住んでゐて、誰一人快く供養してくれるものがない。釋迦は、緣なき衆生は度し難しと思はれたか、そのまゝ町を出ようとしたが、ふと、町端れの小さい家の前にさしかゝると、內から汚らしい老婆が、米の磨汁を捨てようとして出て來た。老婆は釋迦が手にして居られる鐵鉢の中が空であるのを見て、

「あゝ何といふお氣の毒なことであらう。何か差上げたいにも私のやうな貧乏人には、何一つ差上げる物もない。あゝ情けない、情けない」

と歎くと、釋迦は老婆の方に近寄り、

「お前は實に立派な心の持主です。どうぞ私に、お前が捨てようとしてゐる、その白水をわけて下さい」

といはれた。老婆が手をふつて、

「飛んでもない、牛や馬に與へる水を、どうしてあなた樣のやうな尊いお方に差上げられませう」

といふのを、無理にお貰ひになつて、さもおいしさうにグビ〳〵とお呑みになり、

「あゝおいしかつた。有難う！」

とお禮をいはれた。

阿難はふしぎさうに、

「如來よ、あんな白水が、そんなにおいしうございましたか？」

と尋ねた。如來は言下に答へた。

「阿難よ。私がおいしいといつたのは、白水ではない、あの老婆の美しい心ばえを嬉しくいたのである。あの老婆は未來に於いて、必ず立派に佛の國に生れることが出來るぞよ」

といはれた。それをチラリ耳にしたのは一人の婆羅門であつた。彼は突然釋迦に向つて、

「そんなことがあるものか、あんな汚い白水を施したからといつて、佛になれるものではない。お前は大嘘吐きだ」

と口ぎたなく言ひ罵つた。釋迦は別にお怒りになつた樣子もなく、

「いや、私は決して嘘をいふのではない。あの老婆のやうな清い心の持主は、未來は必ず佛になれるのだ」

とお諭しになつたが、婆羅門はなか〳〵承服しないので、釋迦は儼然として申された。

「お前は尼拘樓陀樹（榕樹）を知つてゐるだらう。あの木が大きく生ひ茂ると、その蔭に、五百の車を入れられるといふ言傳へがある。お前はその尼拘樓陀樹の種を知つてゐるか？」

「知らないでか、それは芥子の種子よりも小さなものだ」

「その小さな種を地に蒔けば、あの大きな木になる事をお前は知らないのか？」

「それは知つて居るけれども……」

「おまちなさい。私があの老婆は未來に於いて佛樣になれるといつたのも同じ意味です。どんな小さい行でも、それがよい行であれば、後には立派な實を結んで佛になることが出來るのです」

釋迦は、好んで說敎に比喩を用ひられた。キリストも亦、よく比喩を用ひて大衆を諭されたので

ある。

「汝等は地の鹽なり」

「一粒の麥地に落ちて死なずば唯一つにてあらん、もし死なば多くの實を結ぶべし」

まことに巧妙な比喩ではないか。深遠な敎義は俗人の耳には容易に入り難いが、比喩はよくそれを平易化し、通俗化する。

比喩の効果

だから座談に於ても、對者が自分のいふところを容易に理解し得ない場合とか、自分の說に服しないやうな場合などに、適切な比喩を用ゐると、意外の効果をもたらすものである。忠臣節婦が比喩を用ひて、主君や夫の不行跡を諫めた例は、古來いくらもある。平素は物の道理の解つた人でも、一旦魔道に迷ひ込むと、容易に正道に歸り得ないばかりでなく、他人の忠言などは、中々耳に入らないものだ。そこに比喩の働く餘地があるのだ。

イソップ物語とか、鳩翁道話とかの中に集められてある寓話は、凡べて比喩で、面白い話の中に

巧みに教訓を織り込んだもので、むき出しの訓話と違つて、口あたりのいゝやうに、味をつけ衣をかけてあるから、誰にも歡迎されるのである。だから座談に志す者は、適切な比喩を、なるべく豐富にストツクして置く事が有利である。人に訓戒を與へる場合とか、先輩や友人に忠告するといふやうな場合など、一寸むき出しにはいひにくい時に、最も役立つものは、比喩であるからだ。

頂門の一針

勉强もろくにしないで、始終空想にのみ耽つてゐる學生があつた。妙に虚榮心が强くて、解りもしないくせに、いつもむづかしい原書などを机の上にひろげて、さも精讀してゐるらしいふりをして得意がつて居た。教師が或時、その學生に向つてこんな話をした。

或せつかちな金持が、知人の新宅振舞に招かれて行くと、すばらしい二階に通された。その部屋は、東西南の三方が開けて、眺望がとてもよかつた。金持は急に羨ましくなつて、家に歸るなり、早速大工を呼んで二階建の離室を造らせることにした。命ぜられた大工は、即日基礎工事に着手した。金持はそれを見て、

「棟梁、俺が欲しいのは二階だよ。基礎工事なんかどうでもいゝ、早く二階にかゝつてくれ」

といつた。大工は、ふきだしたい程のをかしさをこらへながら、

「でも旦那、二階を建てるには、先づ下の方からかゝらなければなりません。さもないと……」

と、いひかけると、皆まで言はず、

「そんな事はどうでもいゝ、俺はたゞ二階が欲しいんだ。早く二階を作つてくれ」

といひ張るので、大工はいよ／＼呆れて、

「そのやうな無理な御註文には應じ兼ねます」

といつて、ズン／＼歸つてしまつた。云々。

まことに馬鹿々々しい話であるが、土臺になる勉强をしないで、空想にばかり耽つてゐる學生には、たしかによい教訓である。聞かされた學生は、幸ひにその意味が解つたらしく、それ以來の勉强の仕方が全然かはつたといふ事である。

未亡人と母蟹、子蟹の話

或未亡人があつた。一人娘が年頃になると、どうも素行が面白くない。いろんな噂が耳に入るので、母たる未亡人は心配でたまらない。そこで亡夫の知人のところへ、娘に注意を與へて貰ひたいと頼みに來た。知人は快く承諾した。同時にこの母親にも忠告を與へねばならぬと思つた。といふのは、その未亡人の評判も、あまり芳しくなかつたからだ。

「何しろお一人きりのお嬢さんですからね、どんなにか御心配でせう。私から御話するのはおやすい事ですが、私にそんな資格がありますかしら？　此の間もある本を讀んだら、こんな寓話がありましたよ。母蟹が子蟹に向つて、『お前たちは何といふ歩き方をするんです。横に匐はないで眞直にお歩きなさい』と叱ると、子蟹は、『ちやお母さんが歩いて見せて下さい。そしたら僕たち、その眞似をしますから』といふので、母蟹が、『それ、この通りに歩くんですよ』といひながら匐ひ出したが、やつぱり横にしか歩けなかつたといふのですが、考へて見ると世間にはそんな例が澤山ありますね。私なんかも子供を叱る時によくその話を思出しますよ。さういふ自分も其の母蟹みたいなも

のではないかと。さう思ふと何だか急に恥かしくなつて、ひとりで顔を赤くするのです」

此の小さき寓話は、未亡人の胸に可なりピーンと來たらしかつた。未亡人はくれ〴〵もよろしくと頼んで歸つて行つたが、それ以來未亡人の惡い噂はパツタリと消えてしまつた。皮肉な述懐が効を奏したのである。

引例としての實話

座談を生かすために、比喩が屢〻用ゐられるやうに、實際の話、即ち本當にあつた話を用ゐて意外の効果を奏した例もいくらもある。不幸な子供を戒めるために、他の子供の實例を持ち出すやうな場合がそれである。それには二つの行き方がある。

「何某といふ子供の立派な行を見ろ、あの子のやうにならねばならぬ」

といふ風に、よい模範を示す場合と、

「何某を見ろ、とう〳〵刑務所に引つぱつて行かれたぢやないか。お前も今の中に行を改めないと、あの通りの結果になるぞ」

と、類似の事件を以て戒める場合とである。實例が適切であれば、それが生きた事實であるだけに、一層強く對者の胸に響くわけ。

A氏が數年前、一人の青年を或る商店に世話したところが、最初は給仕同樣で、手當も非常に少かつたので、時々A氏の處へ來ていろ〳〵と不平を洩した。A氏はこの青年に、ジョンソンの話をしてきかせた。

ジョンソンがアメリカ大統領に就任して、始めて演說をした時、

「よう、仕立屋！」

といふ低級な彌次が飛んだ。ジョンソンは、若い時仕立屋をやつたからである。しかしジョンソンは、少しも怒つた風がなく、

「只今、どなたかから、仕立屋といふ言葉を頂戴致しましたが、私はたしかに仕立屋をやつてゐた事があります。その時には、仕立屋を自分の天職と考へて一所懸命その仕事を勵みましたお蔭で、私の店の仕立物は、いつも大へん好評を博しました」

といつたので、聽衆は非常に感動して、最後まで傾聽したといふ逸話である。

この話を其の青年が、どう受取つたかは知らぬが、それ以來不平を言はなくなつた。

A氏はそれ以來、仕事がつまらぬとか、待遇が薄いとかいつて、不平をならべる人に、よくこの話をして聞かせたさうである。

ピンと胸にこたへるやうな實例を、できるだけ多く知つておくこと、これは、座談に變化あらしめ、一種の妙味を持たせる必要上、大切な用意である事を記憶して貰ひたい。

十三、座談と酒落

人間はいつも緊張して居なくてはならぬと、人はよくいふが、私は必ずしもさうとは思はない。時にはゆるみといふことも、人生には必要だと信じて居るものである。「水清ければ魚棲まず」といふ諺の通り、あまり謹嚴一點ばりでは、人が怖がつてよりつかない。座談でもさうだ。たとひ要談にもしろ、互に理窟一點張りでは、まとまるべき話も却つて不調に終るおそれがある。やはりそこに、ゆるみといふか、うるほひといふか、何かしら、ゆとりのあつた方が座談に一層の味が出るやうに思ふ。

洒落滑稽の必要はそこにある。笑ひは突然緊張が破れた時に爆發するもので、笑つて暮すのも一生、泣いて暮すのも一生なら、成可く笑つて暮らすに越したことはない。國と國との外交談判さへ談笑の中に解決した實例は前にも述べた。況んや座談に於いてをやだ。堅い話の中にチョット氣の利いた洒落が入ると、今まで拳を握りしめてゐた人も、思はずクスリと笑つてしまふ。氣分も大いに柔げられる。洒落は砂漠の中のオアシスである。ホッと一息、話にゆとりを置く。此の呼吸が大切だ。

といつて、時も場合も考へずに、むやみに駄洒落を飛ばされては困る。これは非常識といふものだ。どんな藥でも、用ふべきところに用ゐないと、効能が顯はれないからだ。

ではどんな場合に洒落が有効か？

洒落のいろ〳〵

洒落にもいろ〳〵ある。單に笑はすだけの洒落もある。親しい友人同志の會合とか、肩のこらない茶話會の席上など、別にこれといふ用件もない。愉快に面白く、二時間なり三時間なりを過せば

い〳〵といふやうな場合には、洒落の連發もい〳〵だらう。笑はせるのが目的だからだ。

次は對者に退屈を感じさせまいとして出す洒落である。話が容易に進行しない。お互に少々厭きて來た。そこへチョットした洒落が入ると、互にホッと一息ついて、新しい氣分で話を進めることが出來る。言はゞ一服の清涼劑だ。

もう一つの場合は、話が全く行き詰つて、こゝらで話頭を轉換させないと、結局破れてしまふといふやうな時に用ゐる洒落であるが、これはよほど手加減を要する。十分機會をうかがつた上、今だ！ といふ時に出さないと。却つて失敗に終る事がある。

一口に洒落といつても、內容によつて種類が違ふ。俗に地口といつて、單なる言語遊戲——卽ち言葉の上の諧謔もあれば、笑話のやうな材料上の滑稽もある。

「どうだい君、この頃の景氣は？」

「いや全くケイキ一つ食へないよ」

「おい、いくら腹がへつてるか知らないが、ガツ〳〵片端から箸をつけるものぢやないよ」

「すて置け〳〵、何しろ善（膳）は急げだからなア」

「君の靴は馬鹿に小さいやうだね」

「だからクツウ（苦痛、靴）なんだよ」

かういふ種類は、言葉の上にをかしみがあり、滑稽さがある。かうした洒落はポツリ〳〵、時を見計つて出すに限る。いくら上手な洒落でも、矢繼早に出されると、つい「又駄洒落か」と顔をそむけられる。できるだけ新鮮味、滑稽味に富んだものが欲しい。

それは笑話でも同じことである。どツと吹き出す笑ひも悪いとはいはぬが、思はずほゝ笑まれる程度の上品な明るい笑話は、どんなにか座談の空氣をなごやかにすることであらう。

洒落はやはり一種の機才であり、頓智である。かくべつ頭も痛めず、苦心もせず、間髪を容れざる間に出るところに洒落の價値がある。

番頭の頓智

或の店の番頭殿、一夜廊下を歩いてゐると、曲り角でドシンと誰かにぶつかつた。つい、いつも小僧を叱る癖が出て、

「馬鹿！」

と怒鳴つてから、氣がついて、よく〳〵見ると、それは思ひがけない主人だつたので、あわてゝ口へ手をやり、

「……だな、私は。……旦那、ヘエ御免下さいまし」

といつて、頭をペコリと下げたので、主人も怒るに怒られず、

「あゝ、番頭か」

と笑ひながら通り過ぎたといふ笑話がある。

若し其の時、此の番頭がボンヤリ者で、「馬鹿！」といつたきり「だな私は」と機轉をきかす洒落ツ氣がなかつたら、あとでどんなに申譯をしても、容易に主人の心を柔げることが出來なかつたで

あらう。

リンカーンと外套

リンカーンが辯護士をしてゐた頃、他所から歸る途中、非常に疲れてゐたが、當時貧乏のドンソコにあつた彼は、一錢の持合せもなかつたので、馬車に乘ることが出來なかつた。彼が當惑してゐると、折よく一臺の乘合馬車が通りかゝつた。見ると、中に金持らしい紳士が一人乘つてゐた。彼は馬車に近づいて、其の紳士に向ひ、

「私はこの馬車の道筋にあたるスプリングフイールドのリンカーンと申すものですが、まことに恐れ入りますが、この外套を私の宅まで屆けていたゞけませんでせうか」

「それは御易い御用ですが、この寒いのに外套がなくては、あなたがお寒いでせう」

「いや、その御心配はいりません。僕のからだを包んだまゝでお屆を願ひたいのです」

この奇拔な返答に、乘客がみんなどツと笑つた。紳士もリンカーンを面白い男だと思つたか、

「ぢやお預りしませう」

といつて、手をとつて馬車に乘せ、リンカーンの宅まで屆けてくれた。それが緣になつて、二人は無二の親友となつたといふ愉快な逸話がある。

禿頭の愛嬌

或る時、Bが一寸した茶話會に出席した。席上、少し面倒な問題が起つて、甲論乙駁、めい〳〵勝手な事を言つて、容易にまとまりさうもない、そこへ給仕がお茶を持つて來た。いつも口の惡いので有名なKといふ男が、何と思つたか、向側に坐つて居るSといふ男――年が若いくせに、きれいに頭の禿げたSに向つて、突然、途方もない質問を發した。

「ねえ、S君、君のやうに、頭に毛がないと、顏と頭との限界が分らないだらうね」

あまりといへば、あまりな無遠慮、一同ハラ〳〵してゐると、S君すましたもので、

「何アに、皺のよる部分が顏で、皮膚が動かないところが頭だよ」

といつて禿頭をツルリとなでて呵々大笑した。一同哄笑、しばしは鳴りもやまざる拍手喝采に、さしも險惡を極めた一座の空氣は春のやうに和いだ。

「S君の頭のやうに、圓く話をまとめようぜ」

と相談一決。あとはスル〳〵と何事もなく收まつた。S君の頓才を德としたのは、あながちBばかりではなかつたのである。

洒落を出すのが頓才なら、洒落を解する方にも機智が要る。鋭敏な頭が要る。ユーモアを解することは馬鹿では出來ない藝當だ。滑稽を滑稽として、直ちに感受する事ができる人は、よほど頭の働く人だ。

要するに洒落や滑稽は、考へて分るのではほんとの味がない。だから、それを解し得る人の前でなくては用ひても効能がない。佛者の所謂「人を見て法を說け」だ。生眞面目一方の人の前で、洒落を言つて、本氣になつて怒られた失敗はよくある事だ。洒落は、よし一服の清凉劑であるとしても、用ふべき時と、所とを誤らないやうに注意しなければならぬ。

十四、服裝と態度

話といふものは、口先許りの藝當でないといふ事は、少しさうした方面に留意する者の、誰しもいふ事である。耳に聽かせる言葉は口から出る。眼に見せる言葉は身體全體から出る。俗に目が物を言ふといふが、物を言ふのは目ばかりではない。髮も鼻も耳も眉も、時としては結んだネクタイも物を言ひ、手の置き所も物を言ふ。服裝と態度といふ一項目を設けた所以である。

人によると、服裝なんかどうでもいゝといつて、一切頓着しない人もあるが、それは特殊な人に限られた事で、一般には通用しない愚論である。いふまでもなく服裝も、人格表現の一つであつて、その人の服裝を一見すれば、語らざる前に大抵人物の評價はつくものだ。

殊に初對面の場合には、尙更だ。自分の目前にあらはれた人物が、場所柄に似合はない、だらしない服裝をして居るのを見たら、誰だつていやな氣持がするにきまつて居る。始めて會ふ人を訪問する時などは、殊に服裝に注意せねばならぬ。あまり服裝が汚いと、心ない書生や女中のために、

押賣と間違へられて、玄關拂ひを喰はされるおそれがある。

そんなら、どんな服裝がいゝか？　之が問題だ。

身分相應の服裝

贅澤を飾る必要は無論ないが、人に接して禮を失せぬ程度に於いて、出來るだけちやんとした服裝をするがよい。服裝が正しいと自然心持までちやんとなるものだ。禮服を着用した時と、寢衣姿のだらしない時との自分の氣持を比較して見るがよい。極々親密の間柄でない限り、服裝の粗野は對者に輕侮、嫌惡の念を抱かせ、自然話に耳を傾けてくれなくなる。さうなつては、社交上甚だ不利益であるからだ。

服裝についての注意は取りたてゝいふまでもない事だが、普通の場合を豫想して、主な點だけを擧げて見よう。

一、破れたもの、垢のついたものは、如何なる場合にも絶對に着用してはならない。

二、華美に流れるよりは質素な方がよい。

三、衣服は折目正しく、皺のつかぬやうにすること。

四、模樣縞柄は、年齡に相當したものを選ぶこと。

五、地質でも、色合でも、縞柄でも、全體の調和が取れて居るものがよい。羽織が立派でも袴がボロであつたり、袴はすばらしいが羽織が羊羹色であつたりしては調和が取れてるとはいへない。一つ〳〵手に取つて見れば相應な品でも、調和が取れないと、ずゐぶん滑稽に見えるものだ。

以上は目につく主な點だけを擧げたのであるが、目につかない小さな點にも、相當、氣をつける必要がある。衣服が整つて居ても、足袋や下駄が汚れて居たり、洋服の手入が行屆いてゐる割合に、カラやカフスが汚かつたり、服裝は質素だが、頭の物や指環などがけば〳〵しかつたり、どこかにちぐはぐな處があるのは、劍道でいへば打ちこむ隙を對者に見せてゐるやうなものである。

自然の態度

服裝に落度がないとしたら、次に考ふべきことは態度だ。演說では態度といふことをやかましく

いふが、座談ではさほど考慮されてゐない。むしろ等閑に附されてゐる形がある。これは大なる間違ひである。

座談の態度には一定の型といふものがない。座談の內容は千差萬別、態度も從つて千變萬化するからだ。場所、相手、用件、氣分、それによつてそれ〴〵違ふ。

場所についていふと、大體二つの場合が考へられる。日本間と西洋室、お座敷と應接室、坐つて話す場合と椅子に腰を掛けて話す場合とである。むろん相手にもよるが、坐つて話す時にはちやんと膝を揃へてかしこまるのが、日本に於ける普通の禮式である。處が、この膝を揃へて坐るといふ事は、婦人なら相當長くつゞけられるであらうが、男子には非常な苦痛である。殊に洋服の時には尙更だ。そんな場合、主人側で氣をきかせ、

「どうぞ膝をおくづし下さい」

といはれたら、

「では失禮致します」といつて、樂な坐り方をする方がよい。あまり我慢をして、いつまでもかしこまり、いざ立ち上らうとする時に、しびれを切らして倒れたりすると却つてみつともないからである。萬一、對者が何ともいつてくれない時でも、目上や先輩の前とか、冠婚葬祭などの改つた席

でない限り、「失禮させていたゞきます」と斷つて、膝をくづしても、決して無禮には當らない。時勢が時勢だからである。

今度は手だ。手はどこに置いたらよいか。直立の時と同樣、坐つた時まで兩側に垂れて、不動の姿勢をとることも出來ない。といつて腕組みも威張つてるやうで贊成が出來ないし、懷中や帶の間に挾むのもみつともない。殊に長上や先輩の前では愼まねばならぬ。さうした場合、輕く兩手を重ねて、膝の上に置く。これが先づ一番おだやかで無難な態度である。尤も火鉢を出されたやうな場合には、無理に震へながら手を膝に置く必要もなからう。

近頃では椅子を出されることが多い。洋式の應接室がなくとも、ベランダや日本間の疊の上にも椅子を備へてある。洋服の場合には勿論、坐るよりも椅子に腰を掛ける方が有難い。要領は疊の上で坐る時とさして變りはない。成可く腰を深く掛けることは姿勢を正しくする上から必要である。兩脚はそろへて、輕く足を床につける。膝が開いて居たり、脚を重ねたりするのは不作法千萬だ。手はやはり膝の上に輕く置くがよからう。卓に臂をついたり、顎をつゝぱつたりするのは、最も愼しむべきことである。

大體以上のやうな點を注意すれば、人前に出ても、めつたに失敗するやうなこともあるまいが、

しかし、前にもいつたやうに、いつでも、どこでも、誰の前でも同一の態度をとれといふのではない。場所柄の外に、對者を考へて見る必要がある。自分より目上の人であるか、目下の者であるか、それとも同等の水準にゐる人であるか、それによつて態度も自ら違ふからだ。目上の人に對しては、十分の禮儀を保ち、鄭重な態度を取るのが普通であるが、それも初對面の人と、何回も會つて、可なり親しくなつてゐる人とで、多少の手加減がいる。友人同志の時などに、あまり四角四面の態度で接することは考へ物だ。殊に小學生時代の幼友達や竹馬の友などと會つた時に、バカ丁寧な他人行儀は避けねばならぬ。何となくわざとらしく見えるからだ。自分より目下の者には尙更柔かい態度が欲しい。それも公式の會見と、私的な面會とを混同してはならぬ。

言外に物を言ふ眼のつけ所

人の數からいへば、相手が一人のこともあるし、二三人の場合もあるし、座談會の時の樣に多人數の場合もあらう。いづれの場合にも坐り方、腰の掛け方は大して變りはないが、注意しなければならぬのは目だ。對談してゐる時には勿論、對者の顏に目を注いでゐるべきだが、それかといつて

無遠慮にじろ〳〵見つめるのは宜しくない。友達同士なら注意する必要もないが、對者が目上の場合には、多少伏目勝といふところがよからう。又對者が自分より目下の者であつても、上から見下すやうな態度は禁物である。

三人四人になると、その座席の位置にもよるが、大體自分の正面の人に視線を向けるがよい。しかし時には、左右にも目を移す事も必要な場合がある。もとより首ふり人形のやうでは困るが——其の他、座談の最中、欠伸をしたり、よそ見をしたり、物を食べながら話したりする事は如何なる場合にも愼まねばならぬ。

つゝましやかであれ

かういふふうに考へて來ると、座談の態度は實にむづかしい。うつかり人前に出られなくなる。しかしこんな細い數々の注意も、約めて見ると、「つゝましやか」といふ一語で盡きると思ふ。「つゝましやか」は人に對する場合すべての態度の根本となる。相手に嫌惡の情を起させたり、相手の輕侮を招くやうな輕率、粗野な態度は、皆この「つゝましやかさ」が缺けてゐるからである。單に話

をしてゐる時だけではない。坐る時も立つ時も、ドアーを開ける時も、茶を飲む時も、いつでも、「つゝましやか」であつてほしい。「つゝましやか」は決して婦人のためにのみ強調される言葉ではない。同時に、如何に坐つてる時の態度は立派でも、いざおたちとなつて、頭を電燈にぶつつけたり、スツテンコロリところんだり、あやまつてお茶道具を蹴飛ばしたり、長上や先輩にも構はず、いの一番にかけ出したりするやうでは、ぶち壊しだ。注意すべき事である。

要するに座談の態度は、「つゝましやか」であらねばならぬ。沈着、溫顏、上品、自然はその中に入る。親しみの中に禮儀あり、虛禮に捉はれて堅苦しくならないやう、自分も相手も十分所信を吐露する事が出來るやうに仕むける。是れは態度の上乘なものであらう。

十五、座談と癖

何品を見ても、すぐ値をつけたがる癖の親父があつた。或時息子と一しよに他家へ呼ばれて行く途中、息子は親父に向ひ、「お父さん、今日は何を見ても、値をつけなさるなよ。先方へ御無禮に當

りますから」と注意した。

「うむ、俺も悪い癖だと思ひながら、中々なほらぬので困つて居る。これからよく氣をつけよう」といふ。息子は心から喜んで、

「それでこそ申し甲斐があるといふもの、有難うございます」とお禮をいふと親父は、

「いや、お前の意見でこの悪い癖がなほつたなら、それこそお前の意見には千兩の値うちがあるといふものだ」といつたといふ笑話がある。

「無くて七癖」といふ位だから、絶對に癖のないといふ人は萬人に一人もあるまい。

「人は皆一つの癖はあるものよ、我には許せ敷島の道」といふやうな立派な癖なら、いくらあつても差支ないが、中には隨分人に不快の念を抱かせるやうな癖も少なくない。自分では容易に氣がつかないし、氣がついても、さう簡單になほらないことは、前の笑話にあつた親父を見てもわかる。しかしなほり難いからといつて、打ちすてゝ置くべき事ではない。自分で悪癖と氣がついたら、又人から注意されたら、出來るだけ矯正に努力せねばならぬ。でないと、折角の好調に進んだ座談も、小さな一つの悪癖のために、全然打ち壊されることがあるからだ。

惡口とかげ口

世の中には、何でもかでも人の惡口、かげ口をいはなければ、氣がすまぬ人がある。

「どうだらう。僕の方でK君を使ひたいと思ふんだが」

「あれかい。あんな奴は駄目だよ。あいつを使ふ位なら、丸太んぼに洋服を着せて立たせて置いた方がましだよ」

「時に、S君の娘が結婚するさうだが、あれはなか〳〵いゝ娘だね」

「なあに君、あんな娘、どこにいゝところがあるものか、面だつて姿だつて、平々凡々ちやないか」

自分に關係があらうがなからうが、口さへ開けば第三者の惡口をいふやうな人は唾棄すべき劣等人種である。そのくせさういふ人に限つて、本人の前へ出ると、いやに齒のうくやうなお世辭をならべるものだ。東京の郊外に、六十位のお婆さんが住んでゐた。一寸途中で挨拶しても、すぐそのあとで近所近邊の惡口をいふ。いやどこの家はケチン坊だの、どこの奥さんはおひきずりだのとく

だらぬ事をべら〳〵しやべる。どこそこの奥さんは誰々さんと怪しいさうですよ、なんて、聞きずてにならない噂までたてる。だから近所では誰もこの婆さんを相手にしない。「あんないやな婆さんはない」といつて、成可くその家の前を通らないやうにしてゐる。道で婆さんの姿が見えると、いそいで横町にかけ込むやうにして居るが、本人は一向それが分らぬらしい。おしやべりもかうなると、寧ろ憐むべきである。

聞苦しい自慢癖

こんな人間に限つて自分のことをよく自慢したがるものだ。それも癖だといへば癖の一つに相違ない。尤も人間は誰でも自負心を持つて居ない者はない。自慢も或程度までは咎むべきでないが、何かといへば自慢をしたがる人間は困りものである。自分だけならまだいゝが、

「宅の子供は、學校ではいつも優等でしてね」から說き出して、

「私の實家は、村一番の舊家でしてね、今でも土地では一といつて二と下らぬ財産家なんですよ」

とか、

「宅の子供は文學は何でもやりますが、中にも和歌は一番得意でしてね。いつも先生から褒められますよ」

などといふやうなことまで、聞きもしないのに自慢たら〳〵、自分ひとりで得意がつて居るのは、子供の事にしても、實に聞き苦しいものである。

この種の人に限つて、きつと自分を偉く見せようために、虎の威を借りたがる。自分よりもずつと地位や學識のある人をつかまへて、

「あゝ何々君か、あれは僕の友人でね」

などといつて、自分をその人と對等の位置まで引き上げて、自分を實價以上に高く見せようとする。聞く人が聞けば、何といふ禮儀を知らぬ馬鹿者だらうと思ふに違ひない。こんな人に限つて本人の前に出たら、先生とか、貴方とか、丁寧すぎる程丁寧な言葉遣をするんだからいやになる。

自稱大家の失敗

東京市立の或る小學校に、一日、何々子供會々長以下多數の肩書をならべた名刺を持つて、生

徒に話をさせて貰ひたいといつて來た男があつた。校長が、

「都合でやつて貰つてもいゝだらう、君も童話家なんだから、顔を見たら知つてるかも知れない。君一つ會つてくれたまへ」

といふので、兎に角首席が應接する事になつた。男は首席の顔をじろ〳〵見てゐたが、

「あなたが校長さんですか？」

と尋ねるので、首席は、

「いえ、私は訓導です。校長が一寸只今手放せない用がありますので」

と挨拶をすると、その男は急に態度を一變して、何だ平訓導かといはんばかりに、いやにふんぞりかへつた面憎さに、首席もいさゝかムツとして、

「あなたは△△△△先生を御存じですか？」

と、さぐりを入れて見ると、

「あア△△君か、知つてゐるどころでない、昔からの友人でね」

昔からといふ程の年でもなささうだと思つたが、首席はまだ半信半疑であつた。

「では△△先生も御存じですか？」

「うむ、知つてゐるとも。昨日も一寸よそで會つたがね」

かうなると首席もうつかりした事が言へない。兩氏とも童話界の權威者だから、そんな人と懇意なら、まんざらな人ではあるまいと思つたので、兎に角生徒を講堂に集めて、講演をして貰ふことにした。

ところが、いよ〳〵となつて、その先生が得々として語り出した話といふのは、物もあらうに其の首席の創作で、實演童話集に集錄されて居る物であつたから、首席はをかしくてたまらない。こいつ一つからかつてやれと、

「どうだ、うまいだらう」といふやうな顏をして、ゐばりくさつてゐる自稱大家に向ひ、わざと白つぱくれてきいて見た。

「あれは先生の御創作ですか？」ときくと、

「うーむ、さうだよ」

と、そらうそぶく。

「いや大へん結構でございました。だが、私はあれと同じ話を、K氏の著書の中で讀んだ事がありますが……」

と、ズバリ一本眞額からきりこんで見ると、先生俄かにヘドモドして、

「あゝさう〳〵、あれはKの作だつたかね、Kは私の友人なんで、時々あの男の作品もやつて見るんだよ」

といふお託宣である。

首席はふき出したいのをやつとがまんして、わざとしかつめらしい顏をして、

「ハアさうですか、やつぱり御友人ですか、……私はまだ一度も先生に御目にかゝつた事はありませんが、……どこで御近づきになりましたかしら？」

と、とぼけると、

「君？……君となんか會つた事はないよ。どうしてそんな事をいふのかね？」

「でも、今日お話しになつたあの話は私の創作で、私が本人のKなんですから、不思議に思つてお たづねするのです」

首席の此の一言は、彼に取つて致命傷であつた。まさか目の前に本當の作者があらはれようとは思ひもかけなかつたに違ひない。況んやその作者を「友人」あつかひにしたに於いてをやだ。流石の自稱大家も、居たゝまらなくなつたか、挨拶もろく〳〵せず、首席がさし出した謝禮も受取らず

に、這々の體で逃げ出してしまつたのである。罪のない自慢も時には愛嬌になつていゝかも知れぬが、それが癖になると飛んだ恥をかく基となる。「一つの嘘を完成する爲めには百の嘘をつかねばならぬ」といふ金言がある。愼むべし〳〵だ。

反對屋、あまのじやく

自慢の悪癖にもまして困るのは、何でも人の反對をしたがる癖である。人が右といへば左といひ、白といへば黑といふ。何でもない話で、少しも異論を挾むべき餘地のない時にさへ、好んで反對のために反對する人がある。そんな人は、よく對者の話の腰を折つて、

「いや、さうぢやない」

と反對を唱へたがる。非禮も甚だしい。雷同、盲從、固より賞すべきではないが、一から十まで反對するのも感心しない。「枕草子」に、

「人の悪むをもよしといひ、褒むるをもあしといふは、心のほどこそおしはからるれ」

といつてゐるのは、かういふ悪癖の人々への戒めとも解することが出來よう。

表情と無くて七癖

表情や態度の上にも、注意しないといろ〳〵な悪い癖が出る。手の置き場所に困つて、洋服のボタンをいぢくつたり、鼻の穴に指をつッこんだり、ひどいのは疊を引きむしる癖の人がある。ボタン位ならまだいゝが、鼻糞いぢりはきたな過ぎる。やつと新しくかへたばかりの疊をむしられる事も、主人公の身になつたら氣が氣であるまい。

また二言目には、

「いや、どうも」

とすぐ頭を掻く人がある。時々ならお愛嬌にもなるが、度々やると人に輕んぜられる。對者を正視せず、時々人の顏を偷み見するのも悪い癖である。

その他、談話中欠伸をする癖、床を踏み鳴らす癖、一々列擧する煩に堪へないが、誰でも自分では存外氣がつかないものである。吾々は常に座談のあとで、今日は自分の悪い癖が出なかつたかどうかを反省し、次の時にはその悪癖を出さないやうに注意して、悪癖矯正に努力すべきである。

一六、座談の聽き方

最近、或人が伊豆の方面へ講演に出かけた時のことである。

三日目の夜、或る村の婦人會に臨むことになつたが、生憎と急に激烈な齒痛に惱まされ、講演どころか一寸口を開くさへ苦痛であつた。しかし約束だから止むを得ない、兎に角當夜會場である小學校に行つたが、折よく、はげしい雨が降り出したので、「これはうまい。この雨では、今夜は誰も集るまいから、それを理由に靜養しよう」と考へてから、其の旨を校長に話すと、

「でも折角お出で下すつたのですから、ほんの十分でも、お話願ひたうございます」

といふ。それでもいやだとはいへない。十分位なら、どうにかやれるだらうと思つて、待つて居ると、やがて定刻になつた。校長に案内されて暗い廊下を傳はり、教室を打ち拔いた會場に行つて見ると驚いた。豫想が全然裏ぎられて、僅かに三四百戸の村だといふに、會場一杯の入場者だ。どんなに少く見ても二百人以上の老若婦人が、いとも熱心な態度で待ちかまへてゐるのだ。

紹介されて壇上に立つた。聽衆の視線は悉く一點に集中される。何物かを求めようとする輝かしい目だ。彼は語り始めた。一語々々、痛む齒の間を通して出て來る彼の覺束なげな言葉に、全聽衆は身動きもせず、耳を傾けてゐる。それは石像のやうに冷たい存在ではない。一語をも聽き洩すまじとする熱望に燃えて居る顏だ。十分の豫定はとつくに經過した。齒痛はいつの間にか、どつかへ飛んでしまつた。自分でも意外なほど話がはずんだ。聽衆は時には泣いた。時には笑つた。その都度拍手が湧いた。彼は殆ど我を忘れて講演をつゞけた。

かうして約二時間の講演を了へて、控室に戻つた時、校長は意外さうな顏をして彼にきいた。

「御氣分が惡いといふので、十分か二十分でおしまひかと思ひましたら、よくまあ長い間お話し下さいました。會員もさぞ滿足したことでございませう。齒のお痛みは如何ですか」

これに對して、彼はかう答へた。

「いや、今日の話は私が話したのではないのです。會場へ入る時には、非常に痛んでをりまして、とても十分とは話せまいと思つたのですが、熱心な聽衆の態度を見ると、いつの間にか齒痛なんか忘れてしまつたのです。今夜の講演は決して私が話したのではありません。全く聽衆が私の心の中から話を引き出してくれたのです。若し、集つた方に、あれだけの熱心がなかつたら、恐らく十分

どころか、五分間も語り得なかつたでせう」

校長も如何にもといふやうな顔をしてうなづいた。

話上手より聽上手、こんな事は決して珍らしい經驗ではない。俗に「話上手より聞き上手」といふ。どんな名演說でも、聽き手が惡ければ、眞珠を豚の前に投げてやると同樣、眞の價値は認められないものだ。いはゆる「馬の耳に念佛」といふやつだ。演說は決して壇上の話者一人が語るのではない。聽衆もまた共に語つてゐるのだ。横を向き、或は居眠りをしてゐるやうな聽衆に對し、熱心なる聽衆に對すると同樣、熱辯を振ひ得る人があつたら、恐らくその人は無神經か、獨語に馴れて居る人であらう。

獨白形式の演說でも、成功不成功の半ばは聽衆に左右せられるのであるから、まして座談に於てをやで、聽き方の巧拙如何は、直ちに座談を活かしもし、殺しもするのだ。「話に釣られる」といふことがあるが、話者もまた上手な聽き方に釣られるものである。如何に話好きな人でも、碌に聽いてもくれない人に、一時間二時間と話しつゞける人はあるまい。聞かうが聞くまいが、平氣でしやべりつゞける人は、口から先に生れて來た人か狂人だけだ。

よく語るものはよく聽かなければならぬ。人の話を耳にも入れず、自分一人い〻氣になつてしや

べり立てる人があるが、これは決して座談の道ではない。話上手は聞き上手である。對者の話をかみしめて聞いてこそ、對者の意志を十分に知ることが出來るのだ。對者の人物をも見ぬくことが出來るのだ。それに對して、自分が何を語るべきかといふことも考へ得られるのだ。

時としては先方が、話のきつかけが見つからず、容易に話し出せない場合にも、こちらの聽き方がうまいと、まるで糸をたぐる樣に、ぐん〳〵と話を引き出し得るのである。

聽手の親切と不親切

警察には人事相談部といふのがある。Yといふ教育家が、知人の子供が行方不明になつたので、そのことについて、力を借りたいと思つて、某警察署の人事相談係に會つた。すると係の巡査は、威嚴を保つ上からか、頗る横柄な態度で、ペンを持ちながらY氏の顔をぢつと見てゐる。いや見てゐるといふよりは睨んでゐるといふ方が當つて居る。そしてだまつて居る。Y氏は用件を話しかけたが、相變らずだまつてゐるばかりで、聞いてくれてゐるのやら、ゐないのやらサツパリ見當がつかない。「こんな男に話してもだめだ」さう思つてY氏はい〻加減にして其の日は引き上げ、翌日さ

る人の紹介狀を貰つて、直接署長に面會した。これは又人事相談係とはまるでちがつて、Y氏の話を熱心に聽いてくれ、一々要領を書き取つてくれた。かうされると、話す方でも心置きなく話すことが出來るし、聞く方でも要領がつかめるから頗る便利である。職業紹介所あたりの人々も、出來るだけ、まじめに、さうして上手に、對者の血の出るやうな訴へを心から聞いて貰ひたいものであるとY氏はしみ〴〵語つた。

人の話を傾聽するといふことは勿論結構なことであるが、いつでも默つて聽いてゐるばかりが上手な聽き方とは申されない。時には合の手を用ひて話を引出すがよい。これを、「相槌をうつ」といふ。相槌がはひると、話す方で非常に乘氣になる。聽く方でも、一層眞劍になつて聽く氣持になるものだ。

相槌にはいろ〳〵ある。「さうですとも」「成程」「全くです」といふやうな、ごく簡單なものから、長い文章をなすものまで、多種多樣にあるが、對者の話の具合で、自然に出て來て、ピツタリと呼吸の合ふものでなければならない。

「私は此の間初めて日光にまゐりましたが、實にすばらしいもんですな。自然の美といひ、人工の美といひ、唯だ驚嘆の外ありませんね」

といふ旅行談を始めたとする。相手が、「ハア」とか「フム」とか氣のない合の手を入れたのでは、これ以上話す勇氣もなくなるだらう。ところが、

「さうですか、私は未だ行つたことがありませんが、全くいゝ所ださうですね」

といつてくれゝば、話す方でも張り合ひが出るから自然話に油が乘つて來る。

更に感歎の意味を強めて、

「ホウ、そんなにいゝところですか」

と、膝をのり出してきかれると、話す方では一層話に實が入るから聽く方でも一層面白く聞かれるのである。これが上手な聽き方といふものだ。

併し、いつでもこんな呼吸でいゝといふのではない。聽く方の立場からいふと、三つの場合がある。一つは出來るだけ對者の話を聽き度いと思ふ時であり、一つは其の反對に、早く話を切り上げて貰ひたいと思ふ時で、もう一つは、話頭を轉じたいと思ふ時だ。

話をもつと聽き度いと思ふ時は、既に述べたやうな相槌も必要である。ところが、中には相槌も打てない程滔々としやべり通す人がある。早く止めて貰ひたいと思ふ時、殊にさし迫つた用事で、他出しようと思つてる時、心ない客の長談義には、ほと〳〵閉口するものだ。親しい仲なら何んと

でもいへるが、まさか、「もう止めてくれ」と斷るわけにもゆかぬ。そんな時には失禮にならぬ程度で、

「お話の途中でございますが、一寸これから出かけなければなりませんので……」

といつて斷るがよい。

話頭を轉じようと思ふ時でもさうだ。

「お話中まことに失禮でございますが、例のお話はどうなりましたでせうか」

といふふうに、なるべく對者の感情を害さぬやうにして、方向の轉換を計るべきである。

話すことはむづかしいが、聽くといふことも決してなまやさしいことではない。哲人ゼノが、人の言葉を耳にも入れず、一人でしやべる青年を誡めて、

「自然は人に一枚の舌と二つの耳とを與へてゐる。人は話すだけの二倍を聽くべきである」

といつてゐるのは、確かに味はふべきである。

一七、訪問の心得

普通座談の機會といへば、人を訪問した時、人から訪問された時が最も多い。從つて座談の成功者たらん爲には、すべからく訪問の心得を知つておかねばならぬ。かういつたら諸君のうちには、人を訪ねるといふことは、何もそんなにむづかしいことではない。訪問の心得なんて、ばか〳〵しいといふかも知れないが、それは未だ社交の何物たるかを知らない人のいふことで、訪問といふことは、決してそのやうに簡單なものではない。殊に或る目的を以て人を訪問する場合には、一通りならぬ苦心を要するものである。

その目的が何であらうと、それは問ふ處でない。金を借りに行くこともあらうし、就職の依頼に行く場合もあらう。單に親密の度を深めるため、舊交を溫めるために訪問する事もあらう。ともあれ、其の目的を達するのは、社交上一種の技術である。

先方が自分より目下の者であるとか、親しい友人であるやうな場合には、訪問を頭痛に病む程の

こともない。いきなり、案内も乞はずに上りこんだところで、氣心の知れてゐる間柄であれば、「やあしばらく」「ホウ、よく來たね」位ですんでしまふ。それに、是れといふ目的があつての訪問ではなく、會話も、世間話、懇談の域を越えないやうな場合には、訪問する方も、される方も、まことに氣樂であるが、訪問先が、自分より目上の人、殊に名士とか身分のある人であると、なか〳〵厄介である。初めての訪問なら尚更だ。話を交へる前、先づ、いかにして面會を請ふべきかといふ事が一苦勞だ。所謂名士といはれるやうな人は、誰かしつかりした人の紹介でもないと、容易に會つてくれぬ。だから、一度や二度玄關拂ひを食はされたとて、すぐに腹を立てたり、失望したりするやうでは、到底目的を達し得られないのである。

名士訪問には相當の準備がいる。玄關拂ひを食はされるやうなのは、大ていその準備が足りないからだ。會ふまでの準備、會つてからの準備、共に深甚なる注意を要する。やつとの思ひをして會つては貰つたが、會つてからの準備がおろそかであつた爲め、寶の山に入りながら、手を空しくして歸る例はいくらもある。

訪問前の準備

然らば、訪問の準備とはどんなことか。

第一に、訪問先の都合をきかねばならぬ。電話なら、「何某氏の御紹介で何日の何時に御尋ね申上げたいと思ひますが御都合如何でせうか」又は、「何某氏から豫て御紹介願つて置いた○○といふ者でありますがいつ頃あがりましたら、御面會願はれませうか」と取次をもつてきいて貰ふ。電話の便がなければ手紙か往復葉書だが、手紙なら返信料か自分の名宛を書いた葉書を封入することだ。先方が華族や門閥家なら名宛の左脇に「執事御中」とか「參人々御中」とか書く。大官なら秘書官にあてるがいゝ。忘れてならぬのは手紙の末なり葉書なりに自分の住所姓名を明記して置く事だ。どんな用件で、時間はどの位要するかといふ事を明示し得れば猶結構だが、それができない場合には、大約の時間だけでも申込んで置くがいゝ。訪問の時刻は誰でもきくが、所要時間に就いて豫め諒解を得て置く人は割合に少い。しかしこれは甚だ大切なことである。面會の時間をいつておかないと、先方では、長く話しこまれては困ると思つて、來訪を斷るかも知れないからである。

用件の方は、知らせて差支ない場合と、知らせない方が得策な場合がある。

「これからお伺ひして、少々お金を拝借したいと思ひますが」

とあけすけに言つたら、誰だつて、まあ御免だと逃げるにきまつて居る。よし會つてくれても、それまでに斷りの口上を十分考へさせて置くやうなものだ。用件を明かにしたら、面會を拒絶されさうな場合には、

「ぜひお願ひしたい事がございまして、一寸お目にかゝりたいのですが」

「用件は電話では申上げかねますから、お目にかゝりまして、詳しく申上げます」

といつて、ハツキリいはない方がよいかも知れぬ。尤もこれは用件の内容、先方の性格にもよる事で、一概にはいへない。

岸邊福雄氏の機智

女學校長、幼稚園長で童話家としても名高い岸邊福雄氏が東京市會議員の資格で歐米漫遊の途次、紐育で、有名なる紐育タイムス社を見たいと思つて、編輯長に電話をかけた。簡單に自分を紹

介して、五分間だけ御面會願ひたいと申入れたのである。

編輯長はよろしいと返事した。岸邊氏は直ぐに自動車をタイムス社に飛ばした。應接室に通されると間もなく、編輯長が出て來て挨拶した。そこで岸邊氏は、ポケツトから寫眞入りで、日本のアンダーセン來ると題し、岸邊氏を紹介したタイムスの切抜きを示し、

「私がこの寫眞の岸邊であります。私はこんな立派な記事が貴紙に掲載された事を知らずに、貴國に上陸して見ると、私の昔の教子であつて、今は貴國に御厄介になつて居る或る夫人が、此の記事を讀んで、是非園長先生にお目にかゝりたいと言つて、態〻埠頭まで迎へてくれました。私は何十年ぶりで、しかも異境で昔の教子に會つて、涙の出るほど嬉しく思ひました。これは偏へに貴紙のおかげであります。今日はそのお禮に來ました」

かういつて、更にポケツトから、日本の小國旗と、日本兒童の製作品を取出し、それを編輯長に手交し、

「これを記念にあなたに差上げます。お忙しい中をお會ひ下すつてありがたう。では御機嫌よう。グードバイ！」

といつて、手を差出すと、編輯長も非常に喜んで、岸邊氏の手をしつかり握りしめながら、

「ちよつとおまち下さい」

といつて、應接室から出て行つたが、間もなく、厚ぼつたい、すばらしく立派な書籍を持參し、卷頭に萬年筆でスラ〳〵とプロフエサー岸邊に贈呈する旨を特記し、それを岸邊氏に手渡して、

「此の本は幾册もない珍書で、先年貴國の德川公爵が見えた時、一册贈呈しただけだ。日本の方に差上げるのは、あなたが二人目だ、これを記念に進呈する。それから、もしあなたが、當新聞社を御覽になりたいなら、誰かに御案内させてもいゝが如何です」

といつてくれた。渡に船と喜んだ岸邊氏は、

「それでは是非見せて頂きたい」

といふと、電話で秘書役を呼んで、岸邊氏を紹介し、

「此の人に案内させますから、十分に御覽下さい。では私はこれで失禮します」

といつて、再びあたゝかい握手を交して室外に出て行つた。

すると案内役の秘書が時計を出して、

「あなたは何分位、時間を割愛されるか」

ときくから、岸邊氏は、

「一時間位」

と答へると、

「オーライ」

といつて、氏を案内して、社中をグル〳〵見せてくれたが、やがてまた時計を出して、

「丁度これで半分御案内した。もう半分殘つて居るが、お約束の一時間だ。どうしませうか、もう一時間割愛できるなら、全部御案内するが」

といふ。

「もう一時間結構、どうぞ願ひます」

といつて、社中を全部見せて貰つて歸つたが、あとで友人にその話をすると、

「君はえらいなア、吾々は何十年紐育に居るが、タイムスの編輯長に會はうなどとは思ひもよらない。それ程いそがしい編輯長に直接面會して、二時間も社中を案内して貰ふなんて、君は何といふ幸運兒だ」

と驚嘆したといふ。

相手を知れ

初めての訪問ならばその前に、成る可く先方の人物、性格などを知つて置くことが望ましい。若し人から紹介狀を貰つて行くやうな時には、其の人からあらかじめ先方の年齢、履歴、氣質、趣味などを聞いておくがよい。一例をあげれば、

「年は五十を少し越えてゐよう。學歴は何もない。全く小僧から叩き上げた人で、世の中の酸いも甘いも知り盡した人、何一つ道樂もなく、眞面目一方の人だ」

これだけでも聞いて置けば、先方に行つてから非常に氣が樂に話が出來る。心にゆとりがあるからだ。

贈物の是非

訪問の際、贈物を持つて行くべきか、どうか。これは自分と對者との關係、訪問の用件等いろ

な事情を考慮した上でないと斷じ兼ねる。贈物を持參したために、何かさもしい思惑があつての訪問と誤解されたら馬鹿を見る。殊に、先方が官界にでもある人なら、尙更氣をつけないと失敗する。自分の失敗だけですめばいゝが、先方にまで飛んだ迷惑を掛けぬとも限らぬ。清廉の士ならば、きつと頭から怒鳴りつけるであらう。

山路獨眠龍將軍が、鎭臺司令官として大阪に赴任した時のことである。某御用商人が一尾の鯛をお祝にといつて持つて來た。將軍は直ちにそれをつッかへした。

件の御用商人はかげにまはつて、

「今度の司令官はまことに氣の小さい人だ。まさか鯛一尾ぐらゐで、賄賂にもなるまいに」

と嘲笑した。それを洩れ聞いた將軍は、

「一尾の鯛が二尾となり、十尾が二十尾となり、更に黃金色の鯛と變り、はては白粉をつけた鯛とでも變られたら厄介だからなア」

といつて、呵々大笑されたといふ。

乃木將軍と贈物

乃木將軍が臺灣總督に任ぜられたといふ新聞が出ると、多くの御用商人が蟻の如く將軍の門に集まつた。例によつて高價なる反物や商品切手、菓子折、書畫、骨董の類が、「御見舞」または「御祝ひ」の名義で、乃木邸の玄關に持ちこまれた。無智大慾の御用商人共は、これによりて將軍の愛顧を得、海老鯛式の利權にありつかうといふのである。

併し將軍の心は石であつた。百錬の名刀も傷ける事のできない鐵であつた。將軍は書生と馬丁に命じて、一つ殘らず贈主に返付させた。

「こんな物をお貰ひする理由がない。今後も絶對にお斷りする」

御用商人はふるへあがつた。爾來臺灣總督府は、彼等にとりて唯一の鬼門となつた。

將軍が臺灣總督をやめて上京されたのは、明治三十一年の二月であつた。しかも隆々たる聲望は昔日に倍するものがあつた。

早くもそこに眼をつけたのは某會社の重役である。今回新たに創立された某大會社の社長になつ

て貰ひたいといふ申込みで、報酬はお望み次第、いかやうの御申出にも應ずるといふ、まるで牡丹餅で頬ぺたを叩くやうなうまい話であつた。

將軍は無論一言の下に謝絶した。二度來た、三度來た。その都度キツパリと斷つた。それでもまだ諦めきれなかつた重役は、利權會社の重役に就任した陸海軍の巨頭某々諸氏の名を列擧して、將軍の承諾を强要した。

將軍はおしまひまで、一言も發せず、客の勸説をきいて居たが、やがて女中に命じ硯を取寄せ、何やらサラ〳〵と紙にしたゝめ、それを客の前に無言でさし置き、サツサと座をたつてしまはれた。

客が何だらうと思つて、手に取つて見ると、その紙片には左の如き一首の和歌が認めてあつた。

もの丶ふは玉も黄金も何かせん
　命にかへて名こそ惜しけれ

相手を知らぬ不用意の訪問程勞して効なく徒らに無駄骨を折るものはない。

眞心の贈物

某童話會でも、一度某將軍に講演を頼んで、あとでお禮のしるしに菓子折を持參し、ひどく叱り飛ばされた事があるといふ。日本人には、妙に人に物をくれたがる癖がある。贈物さへすれば先方は喜ぶものと思つて居るかも知れないが、大間違ひだ。持つて行つても無禮にならない、また迷惑にもならない家なら持參するもよからうが、その場合、品物は必ずしも高價な物を要しない、要は心からの贈物、まごころの贈物でありたい。海老で鯛を釣らうなどといふさもしい考から持つてゆく贈物は、どんなに高價な品でも値うちがない。或る人が名士を訪問する時先方に子供がゐるからと思つて、百貨店で上等のお菓子を買つて持つて行つた處、口では「有難う」といひながら、少しも喜んでくれなかつた。二度目に訪問した時、自分の畑で作つたとりたての苺を持つて行つたら、心から感謝されたといふ話がある。畑でも持つてる人なら、なるべく手作の野菜や果物を持つてゆくがよい。眞心のこもつた贈物であれば、よし價格は低くても、結構先方に喜ばれるものである。乃木將軍なども、さうした好意の贈物は喜んで受けられたやうである。總督府の守衛をしてゐる安

藤元節といふ人が、歸省して、少しばかりの漬物を土産に將軍の邸を訪れた。その漬物は、安藤氏の知人が、手づから漬けたもので、

「あまりうまかつたから持參しました」

と申添へた。將軍は非常に喜ばれて、心よく受納されたのであつた。誠意で持參した物なら、花一輪、蜜柑一箇でも喜んで受納するといふのが、將軍の主義であつた。

但し、いくら眞心がこもつて居るからといつて、賄附の下宿屋やアパートに住んで居る人に、手づくりの野菜だからと、ウントコ持ちこむのは非常識だ。少くも先方にとつて、何かの役にたつものでなくては、貰つた方で却つて迷惑するからだ。

初對面の挨拶

準備も出來た。心構も出來た。いよ〳〵先方の玄關にたつたとする。呼鈴があれば、それを押せばいゝが、それがない場合には、どうするかといふに、極く親しい間柄なら、

「今日は！」

「おい、ゐるかい」

と、無造作に聲を掛けてもよいが、改まつた訪問ではさうはゆかぬ。

「御免下さい」

とか、

「お頼み申します」

などいふのが普通である。すると女中とか書生とかが出て來る。

そこで最初に「私は何某と申しますが」と名刺を出し、然る後に、

「御主人は御在宅でございませうか」

又は、

「奥様はいらつしやいませうか」

と在否を確め、來意をつげて取次いで貰ふのである。豫め電話で都合をきいた上の訪問なら、

「先程電話で御都合を伺つた何々と申すものです」

といつて、名刺だけ出せば用は足りよう。

幸に面會が出來たら一通りの挨拶を述べ、直ちに用件を切り出すがよい。非常に忙しい人であ

つたら、最初に、

「十分位、お邪魔致したいと存じますが、御差支ございませんでせうか」

と念を押す方がよい。更に、會つてはくれたが、どつかへ出かける前であるとか、何か取込みがあつて、先方が落付いて話の出來さうにもない場合には、

「大變御取込みのやうでございますから、又明日にでも改めてお伺ひ致したいと存じますが」

といつて、アツサリ引き上げた方が、先方に好感を與へるに違ひない。尤もその場合、

「いや、十分位ならよろしい、お話を伺ひませう」

といはれたら、強ひて歸る必要もあるまい。

辭去のしほ時

しかし要件が濟んだら、なるべく早く辭去した方がよい。だら〳〵と、いつまでも無駄話に時間を費して、箒を立てられるまで尻を落ちつけてゐるのは、あまり感心した事ではない。自分が閑だからとて、人の迷惑を考へないのは非常識である。殊に、食事時が近づいたのに、御輿を据ゑてゐる

のは、心ない業である。相手は勿論、家族にも氣をもませることおびたゞしい。

「何といふ圖々しい男だらう。あんなあつかましい人間はない」といふ印象を先方に與へることは社交上最も損である。といつて折角出してくれたお茶まで飲まずに歸るのも考へがなさすぎる。紅茶や珈琲を出されて、半分ものまずに殘してゆくのも心ない仕方である。併し、遠慮卽ち美德とのみ考へるのも愚かな話で、時には先方の厚志を受けて、快く食事を共にしつゝ懇談をつゞける方が得策な場合もあらう。要は先方の思惑次第で、辭去の時機を誤らないやうにすることが大切である。先方はもつと長くゐて貰ひたいと思つてゐるのに、むやみに歸りを急いで、折角の厚意を無にする事は、却て先方によい感じを與へないものである。

十八、接客の心得

昔江戸に櫻間青涯といふ有名な畫家があつた。妻も子もなく、たつた一人で、ひどいあばら屋に住んでゐた。雨が降ると屋根から雨が漏るので、片手に傘をさして畫を描くといふ有樣であつた。

ある日一人の友人が訪ねて來た。その日は上天氣であるのに、門がしまつてゐる。留守かと思つてのぞいて見ると、どうやら人がゐるらしいので、聲をかけると、

「先生は、今日はお留守でございます」

といふ、其の聲は正しく青涯本人の聲であるから、

「其のお聲は確かに先生のやうですが……」

といふと、家の中から同じ聲で、

「もし〳〵、物干の洗濯物が乾いて居りますか」

ときくから、友人はいよ〳〵變に思ひながら、

「よく乾いてゐますよ」

と答へると、

「あゝさうですか。洗濯物が乾いてゐれば先生は御在宅です。お入りになる時、序でに、洗濯物を持つて來て下さい」

友人はいはれた通り洗濯物を物干から下して、それを持つて家の中に入つて見ると、驚くべし青涯はまる裸だ。

「やあ、失敬々々」

かういひながら青涯は大急ぎで着物を着た。青涯は着換の着物を一枚も持つてゐなかつたのである。彼は、着物の事などに一向無關心で、たゞひたすら藝術の道に勵んでゐたのである。

この一節の逸話の中には、藝術家肌の青涯の面目が、躍如としてあらはれてゐて面白い。青涯は友人に嘘をついた。訪客に對して居留守をつかつた。しかしその場合、青涯の無禮を咎めるものは、恐らく一人もなからうと思ふ。訪ねて行つた友人も、決して腹をたてなかつた。寧ろ、藝術のために慾も得も忘れて、一路丹青の道に精進してゐる青涯の、洒脫な、超世間的の大人格に對して、敬慕の念を禁ずることが出來なかつたのである。

居留守は非禮

けれどもこれは、特別の人、特別の場合に限られる事で、日常の社交に於ては、居留守を使ふことは非禮の振舞である。卑怯なやり方であると思ふ。

「會ひたくないから歸してしまへ」

「會へば面倒だから、留守だといつて斷つてしまへ」

といふ例は、世間にはザラにある。それは論外だが、どうしても會へないなら取次の者に、

「甚だ失禮ですが、昨今手離せない用事があつて、お目にかゝる事ができませんから、御用件は改めてお手紙でお申越しを願ひます」

と出來るだけ丁寧に、客が氣持を惡くしないやうに、歸つて貰つた方が、むしろ男らしくていゝ。何も、嘘をついて居留守をつかふ必要はない。嘘も方便といふ事もあるが、それも事によりけりで、家庭に子供でもあればなほの事、子女の教育上からいつても、決して好ましいことではない。

それについて面白い實話がある。父が子供に向つて、

「坊や、誰かお客樣が來て、お父さんがゐますかときいたら、ゐませんといふんだよ、いゝかい」

といひ聞かせておいた。ところが程なく父親の上役が急用があつてやつて來た。客は玄關で遊んでゐる子供に向つて、

「坊ちやん、お父さんはゐますか」

と尋ねた。子供はこゝだと思つて、父親に言はれた通り、

「ゐません」

と答へると、客はさも困つたらしく、

「さうですか、そりや困つたな。遠くへ行かれたのですか、近所ですか？」

と尋ねた。子供は困つてしまつた。そこまでは教はつてゐなかつたので、何と答へていゝか分らない。當惑の餘り、奥の方を向いて大聲に叫んだ。

「お父さん、今度はなんて返事をするの？」

その一言で、客は憤然として歸つてしまつた。それ以來、上役の覺えめでたからず、とう〳〵會社を首になつたといふ。嘘も方便か知らないが、一生の運を棒に振つてはたまらない。

豫め手紙か、電話で都合を問合せて來た客人を斷る人はなからうが、不時の來客でも、特別の理由がない限り、なるべく會つてやるがよい。自分が人を訪ねて會へなかつた時の不愉快さを思つたら、無下に玄關拂ひを食はせる氣にはなれない筈である。

しかし初めての來訪者で、知人の紹介狀も何も持たない者に對しては、取次の者に、一應用件を聞かしめた上で會ふがよい。もし自分が偶然取次に出たやうな場合には、

「私が何某ですが、御用件は？」と聞いてから、通すとも斷るとも態度をきめるがよからう。

某講演家の失敗

通俗講演で相當知名の人があつた。家族がみんな外出して、一人で留守居をしてゐる時、玄關のベルが、チリ〳〵と鳴つた。

誰だらうと、自身で出て見ると、客は一面識もない、若い上品な紳士である。

「突然上りまして失禮でございますが、私は、昨日先生の御講演を何々講堂で伺ひましたもので」

かういつて、若い紳士は丁寧に頭を下げた。

「ハハア、講演の依頼に來たのだな」

と思つたので、その人は別に怪しみもせず、用件も名も聞かずに、

「さうですか、さあどうぞお上り下さい」

といつて應接室に通した。そこへ女中が歸つて來たので、お茶やお菓子を出させた。客はしきりに恐縮です〳〵といひながら、盛んに茶をのみ、菓子を頬ばつては、

「いや、昨日の先生のお話には全く敬服致しました。私もあの時聽衆の一人として、感激しながら

承つてをりました」

といふ。

「いや、恐れ入ります。別に大した話でもなかつたのですが……」

と謙遜すると、

「いゝえ、私ばかりではありません。聽衆は全く先生のお話にチヤームされて、一人として感激の涙に咽ばない者はありませんでしたよ」

褒められるのもいゝが、かうおだてられると、馬鹿でない限り多少氣がさすのが人情だ。

「さうでしたかな、極めて平凡な……」

「いゝえどういたしまして、平凡どころか、近來稀れなる名御講演と敬服いたしました」

客はまだ同じ讃辭をくりかへして居る。主人は少しうるさくなつた。そればかりか、いつまで經つても、名乘りもしなければ用件を切り出さないので、

「ところで今日の御用向は、どんなことでございませうか」

とこちらから切り出した。すると、若い紳士は急に調子をかへ、

「いや申遲れました」

とピヨコリ頭をさげて、

「實は、私はかういふ者でございまして」

といひながら、差出した名刺を見ると、某生命保險會社 外 交員何某とある。主人は心の中でオヤオヤと思つた。

「實は社會の指導者ともいふべき先生に、是非一つ御加入を願ひたいと思ひまして、態と參つたものでございますが、如何でせう。先生なり御家族なり、どなたか御加入願へないでせうか」

主人は何だか擔がれたやうな氣がして、一時はひどく不愉快だつたが、考へて見れば、落度は自分の方にあつて相手にはない。最初取次ぎに出た時、用件を聞いた上で通せばよかつたのを、うつかり講演の依頼だなと早合點をしたものだから、とんでもないひまつぶしをしたのである。さう思ふと格別腹もたゝないので、いゝかげんにあしらつて歸した。一面識もない人間を、むやみに奥へ通すもんぢやないねといつて其の人は苦笑した。

二つの教訓

此の知名なる講演家の失敗談をきいて、諸君は、思はず腹を抱へて笑はれるだらうが、吾々は此の失敗談を通じて、座談の要諦に關する大なる教訓を見出す事ができると思ふ。

先づ第一に感心するのは、此の保險勸誘員が、糧を敵に借りて、まんまと本城へ乘込んだ巧妙なる策戰振りである。保險の大切な事は誰でもよく知つてるくせに、保險會社の勸誘員だといふと、人が妙に毛嫌ひして容易に會はうといつてくれない。從つて正面から何々保險會社員でありますが と名乘つたのでは、容易に面會してくれないから、彼等はいろ／＼の策戰を用ゐて、面會の機會をつかまうと努力するのである。面會さへ出來れば、あとはこつちの腕次第で、どうにでもなると彼等は信じて居るのである。

偶然、取次ぎに出た主人の顏を見るなり、

「私は昨日先生の御講演を何々講堂で伺ひましたもので」

ときり出した處に、此の勸誘員の頭の働き、――凡ならざる頭腦の閃きを見る事が出來る。褒め

られて腹を立てるものはないといふ人間の弱點を巧みにつかんで、名もきかず、用件もきかずに、

「どうぞおあがり下さい」

といはしめるまでに漕ぎつけた手腕は、實に見上げたものである。

その時にもし彼が、いきなり肩書つきの名刺を出したらどうだらう。

「せつかくですが、今は忙がしいから」

とか何とかいつて、十中八九、玄關拂ひを食はされたに相違ない。

かうして第一歩に成功した彼は、おもむろに用件をきり出すべく機會を狙つて居たのであるが、しかけた係蹄があまりみごとに成功したために、自分でも足ぬきが出來なくなり、まご／＼して居るうちに、却つて敵に機先を制され、

「さて御用件は……」

ときり出され、結局内かぶとを見すかされて、せつかくつかまへた獲物を、まんまと取逃がすやうなヘマを演ずる事になつたのである。

もしその時に勸誘員が、第一の策戰、功を奏したと見るや、直ちに第二段の策戰に取りかゝるだけの餘裕と機敏さがあつたら、先方が、まだ係蹄にかゝつたとも知らず、いゝ氣になつて合槌をう

つて居る間に、

「時に先生、私も商賣上、どうかして先生のやうに、話術の蘊奥を極めたいと思ひますが」

とか何とか、うまい具合に話を進めて、どこまでも先方に、かつがれたなといふ感じを抱かせずに、最後のきり札を持ち出す事が出來たら、「い〻加減にあしらはれて」追ひかへされるやうな失敗を演じ、流星光底長蛇を逸するの恨をのんでスゴ〳〵退却する羽目にならなかつたらうと思ふ。座談の要諦は機微に存する、くれ〴〵も注意すべきである。

訪問を受けたら

人を訪問して、玄關拂ひを食はされるのは、まことにいやなものだが、應接間へ通されてから、長い時間待たされるのも不愉快千萬なものである。それを考へたら、自分が人の訪問を受けた時には、なるべく客を待たせぬことだ。若し他の面會客があるとか、手を放せない用をしてゐるといふやうな時には、その理由を話して、

「しばらくお待ち願へますか？」

とたしかめた上、通すがよい。其の際、お茶やお菓子を出すこともよからうが、もつと必要な事は、客を退屈させない方法を講ずることだ。例へば、應接室に畫帖とか、寫眞帖とか、新聞雜誌などを備へ付けて置くがよい。又、客によつては主人が出られるまで、他の家族が代つて相手をすることもよからうし。大した用向きでなかつたら、自分で玄關まで出馬し、腰掛け話で簡單に片付けるもよからう。客の方でも、應接間に通されて、三十分も一時間も待たされるよりは、其の方がどれだけ有難いか知れぬ。

客に接するには、勿論相當の禮儀を守らなければならない。服裝の如きも、失禮にならぬ程度に整へて出るべきである。特別な客でない限り平常着で差支へないが、破れた物や垢のついたものは見苦しい。和服なら袴をつけた方がいゝ。

これは婦人に限る事だが、客を待たして置いて風呂に入り、丹念に御化粧をしてから應接する人がある、婦人の身だしなみとしては、さもあるべき事かも知れないが、其のために長時間待たされる客こそいゝ迷惑である。しかもそれが客に對する禮儀といふよりは、一種の競爭意識から出たおめかしであつたら、尙更である。

たとひ多忙の身であつても、既に客に迎接した以上、早く歸れがしの素振を見せることは失禮に

當る。といつて、何でもかでも客を長く引き止めようとするのも、決して客に對する禮儀ではない。客の都合も考へないで、無理に引き止めるのは、却つて客に有難迷惑を感じさせるからである。

客がたちかけたら、

「どうです、もう少し御ゆつくりなすつては……」

と、一應止めるのはいゝが、

「有難うございますが、これからもう一二ケ所、おたづねしたい所がございますから」

とでもいつたら、

「さうですか、もつと御ゆつくりしていたゞきたいのですけれど」

といつて、客の心まかせにすべきである。一體、日本人には虚禮が多くていけない、歸りたくなくても、

「もう失禮致します」

といつて見たり、内心、早く歸つて貰ひたいと思つてゐながら、

「まだいゝぢやありませんか。もう少し御ゆつくり遊ばせよ」

などと心にもないお世辭をいふものが多い。失禮にならぬ程度に、もつとアツサリ運べぬものか

と殘念に思ふ。

客が見えたら、履物を直して置くべきはいふまでもないが、目上の客や改つた客なら、玄關まで見送つて後から外套を着せかけてやるぐらゐの機轉はあつてほしい。もし夫人や女中も見送りに出る場合には、外套や帽子、ステツキの世話はその人達に任した方がよいかも知れぬ。客が外套を着ずにそのまゝ出ようとするやうな場合には、

「どうぞ御遠慮なく御支度下さい」といふがよい。客が歸つたあとですぐ客の惡口をいふやうなことは最も慎しむべきことで、萬一それが客の耳に入つたら飛んだことになるし、さうでなくても、人のかげ口をきく事は、家庭教育上甚だ面白くないことである。

十九、玄關問答

徳富蘆花氏の「寄生木」といふ小説の中に、大木邸の玄關番を承つた篠原良平が、東北辯そのまゝで、纂の如くはひつくばつて、來客に應接して居る面白い光景が描かれてある。

「根津でございまする」と申された。その聲が低かつたので、良平はためらつた。恰も次の間に居られた大木將軍がきゝつけて、遽しく襖をあけて出て來られた。

「さア、どうぞ！　さア」

根津將軍、靴をぬぎにかゝると、主人中將、

「さアどうぞそのまゝで。どうぞ其のまゝ――どうぞこちらに！」

襖の彼方に、主の謹嚴鄭重な挨拶がきこえる。良平は思うてゐた。大木將軍は攻城野戰の驍將、眼中に上官とか階級とかいふものはあるまいと。良平は、今日、主人の禮儀正しく、階級を重ずるの深きにうたれた。

困つたのは拓殖務省。或日將軍は、

「むーッ、拓殖務省に行つてゐるから、來客があつたらさう言へ」

といひ置いて、早朝から出られた。

高帽の髯うるはしい鼻眼鏡の紳士、小さな城大の馬車からヒラリと降りて、

「大木さんは御在宅？」

といひ〳〵寄つて來た。

デップリ太つた男が、破鐘聲で、

「おゝ、大木さんのお宅はこちらだろ」

「はい、左樣の儀にござりまする」

「うむ、此の度は遠方に御苦勞でござる。植松がよろしくと申上げろ」

何ちふ、顏に似合はぬ高慢ちきな男かと、蓁は思つた。

香取男も來られた。歸りに車にのりながら、

「あなたも御一緒に臺灣に行きなさるか。うむ、さうか」

と、ゑみもらしつゝ、帽をとり、恭しく頭下げて歸られた。あゝ懷かしい善ささうな老人の方と蓁は見送つた。

空色の絹着た面長色白の、やさしい婦人が車から下りて、濃紫の風呂敷包前に置き、

「あのう、千田の家內でございます」

と禮された。良平は一禮し、終つて頭をあげると、夫人の黑髮の鬢が、まだ疊をはなれてゐなかつた。良平はわが不作法を愧ぢた。

根津大將も來られた。一葉の名刺と共に、

「はい。唯今は留守で、いや、お留守でございまする」

留守といはうか、お留守といはうか、良平は苦心慘憺たるものであつた。一家の代表をして取次ぐには、當家の主人は留守といふが至當であるが、微々たる一食客の分際では、やつぱり閣下はお留守といふが穩當だ。

「どこに行かれたな？」

「はい、左樣の儀にござりまする。主人儀は、先刻、拓殖所にお出かけでござりまする」

「どことな？」

「はア、拓殖局に……」

「なに、拓殖務省ではなかつたか？」

「はい、その、それで御座りまする」

「うむ。さうか。分りました」

紳士は笑ひを忍んで馬車をかへした。

「訪問者の面目がそれ〴〵活躍してゐて面白いではないか。人もなげなる植松某、溫厚な君子然たる香取男、その對照が玄關子にどんな印象と感想を與へたか。謹嚴なる大木將軍が、先輩の根津大將を迎へて、鄭重なる挨拶ぶりは、吾々に何を敎へるか。更に、玄關子の言違へを「あゝ分りました」と輕く受けて、笑ひを忍んで歸つたといふ鼻眼鏡の紳士の應對ぶりも、さうした場合のよい參考にならう。

「唯今は留守で……お留守で」の一節は、ちよつと問題にならう。普通、そんな場合、主人より目上の人や先輩には、

「主人は留守でござりまする」

主人と同格、また目下のものには、

「御留守でござりまする」

といふべきであらう。これは、主人があらかじめ玄關子に言ひ含めて置く方がいゝ。

その同じ玄關子が、濱松で、大失敗を演じた一節も面白い。

「篠原！　君は近頃は將軍の家庭に育てられて、萬事開けて來た。が、最初は隨分田舍者だつたぞ。遠州濱松で、君は俺等の室の障子をスルリと坐りながら開けたのはいゝとして、其の言草が甚だを

かしい。

『畏れながらお伺ひ仕りまする儀は、臺灣總督府副官海軍大尉山下義勝殿は、お留守でござりまするか』

といひ終つて、兩手をつきだんびらになつた。其の眞面目くさつた風ッたら、實にをかしくてたまらなかつたぞ。俺等はあとで、事務官と二人で腹を抱へて笑つた。おい篠原！　恐れながら伺ひ仕る儀……まるで芝居の口跡見たやうだ。俺等は、どうしてこんな變物漢が、將軍の書生になつたらうと、頗る解釋に苦しんだぞ」

あまり固くなると、往々にして人はこんな失敗をやる。敬語も注意しないと却つて滑稽になる。他山の石として記憶して置く事だ。

二十、挨拶の仕方

挨拶は座談のスタートである。そのスタートの巧拙によりて、相手の輪廓が大よそわかるものである。挨拶といふのは、至極簡單なやうで、その實なか〳〵むづかしいものだ。相手の人物により、その場その場にふさはしい挨拶が、自然に出てくるやうでなければならぬ。それがなか〳〵むづかしいものなのである。最初の挨拶につまづくと、とかくへドモドして、あとの言葉がつゞかなくなるものだ。だから附燒刄ではいかぬ。いつ、いかなる時でもすら〳〵と出るやうに、日頃から修養をつんで置くことが大切である。

昔或る旅行好きの人が、徒歩で東海道を旅行し、駿河國原の宿で、一軒の茶店に腰をかけ、軒端に見える富士の雄姿をつく〴〵ながめながら、

「あゝ、富士は流石に天下の名山、大きいものだな」

と思はず歎美の聲をあげると、そこへ澁茶を汲んで來た優しい女中が、

「お客様、お山はあんなに大きうございますが、半分は雪ださうで御座いますよ」
と言つた。その人ひどく感心して、家に歸ると、早速妻にその話をすると、妻はツンとして、
「其の位の事、何も感心するに當らないぢやありませんか、私だつて出來ますよ」
といつて居る所へ、隣の隱居さんがやつて來て、
「ほうもうお歸りか。おめでたう〳〵、長い旅でお疲れかと思へば、却つて太られたやうぢやな」
「さうですか、太りましたかしら」
「少しどころか、ずつと太つて、大へん御丈夫さうに見えますわい」
細君、此の時とばかり、
「御隱居樣、主人がこんなに太つて見えますのは、半分は垢でございますよ」
とやつてのけたので、隱居さんも主人もあきれはてゝ、しばしは開いた口が塞がらなかつたといふ笑話がある。つけ燒刄といふものは、とかくこんな風にはげるものだ。
子供が父や母に代つて使に行く時、「先方へ行つたらをぢさんに、此の間はありがたう御座いましたとよろしくお禮をいふんだよ」と敎へられて、さて行つて見ると、叔父さんがゐないで、叔母さんが出て來たりすると、挨拶の言葉に窮して、眞赤な顏をして逃げ歸るやうなことがよくあるもの

だ。落語に出て來る與太郎ばかや、足りない亭主のまぬけぶりは、其の適例である。
一口に挨拶といつても、形式は千差萬別である。途上、人と行き會つて、
「やあ！」
「今日は！」
といふ簡單なのもあれば、
「お寒うございますが、おかはりございませんか」
といふやうな時候の挨拶もある。さては新任、告別、慶事の挨拶等、數へ上れば果しもない。
挨拶はその場合々々によつて變化するのが本體だから、あらかじめ型を示す事は出來ぬ。碌に挨拶も出來ない人、融通のきかない人に、變な敎へ方をすると、結局落語の種となるのがおちだ。
幼稚園に遊びに行くと、園兒が午後でもいつでも、「先生、お早う」と挨拶する、園兒はお早うとさよならの挨拶が口癖になつてゐるのである。人に會つたら、「お早う」別れる時には「さよなら」といふものだと思つて居るのだから何でもないが、之が大人だつたらどうだらう。
「あいつは馬鹿だ。朝夕の挨拶さへ知らない」と低能者扱ひにされるにきまつて居る。
或る寺の和尙が、他へ轉任するときいて、平常よく出入してゐた隣のお婆さんが暇乞ひに來た。

「和尚さん、折角まあお心安くなりましたのに、お別れしなくちやなりませぬ。何ともお名殘り惜しいことでございます」

老婆の聲は涙に曇つた。和尚はお婆さんを慰めるつもりで、

「いやお婆さん、殘念ぢやがこれも浮世ぢや。しかしな、私のあとへは、もつと立派なお人が見えますから、よろしく願ひますよ」

「ほんとに、あなたのおあとへ、そのやうな立派なお方がお見えになりますか？」

「如何にも」

「いえ、それはあてになりませぬ。私が覺えてから、あなたはちやうど六代目ですが、かはるたんびに、だん／＼わるくなるばかりでございますよ、ハイ」

何の氣なしにうつかり言つてしまつてから、氣がついて、慌てゝ口を閉ぢたがもう遲い。現在目の前に居る人を六代中の最惡僧にしてしまつたのだから、本人もさぞきまりが惡かつたらう。

それ程あからさまには言はないまでも、こんな失敗は往々あるものだ。注意すべきことである。

二十一、初對面の座談

座談で一番むづかしいのは初對面の時だ。といつて初對面を忌避したら、永遠に新しい知己は得られない道理である。そんな退嬰的なことでは、結局社交界の落伍者とならねばならぬ。

初對面の座談はむづかしい。それに及第してこそ自分の能力がはじめて發揮されるのだ。遲疑してはならぬ、逡巡してはならぬ。自己の運命を開拓する第一歩だと思つて努力せねばならぬ。初對面に最も大切なる事は、第一印象に於て對者の心をキヤツチする事だ。誰しも第一印象といふものは、いつまでも頭にこびりつくものだからだ、最初に顏をあはせた瞬間。

「いやな奴だ。きざな男だ」

といふやうな惡印象を對者に與へると、それをとりかへすのに非常に困難する。先入觀念が物をいふからである。

苦い經驗

D氏は語る。以下「私」はD氏自身である。

初對面の印象如何が、自己の將來の運命を左右するのだと思へば、座談の上にも一段の苦心を要するわけである。私自身も青年時代にさうした苦い經驗をなめた事がある。

或る重要な用件で、未知の人と面談した際、多分私の粗野な言葉が禍したのであらう。意外の誤解を受けて、何等要領を得ずして辭去したのである。其の後どうかして自分の眞意をつたへたいと思つて、いろ〳〵苦心したが、先方では少しも私の心持を分つてくれないばかりか、しまひには私に會ふ事さへ好まないやうに見えた。用件が別に先方に面會を回避させるやうなことではないに拘らず、最早面會の要なしといふ、權もほろゝの挨拶だ。私は完全に失敗したのである。

そこで私は間接的な方法を選んで、其の人の知人であり、私の先輩である某氏に事情を話して、「いつか機會があつたら、あの男は言葉は粗野だが、まことに心は純な男だ。二三度あつて見るとあの男のいゝ處がだん〳〵分つて來る、といつたやうな事を傳へていたゞきたい」

と依頼したのである。某氏も私の心を諒として、その人に會つた時に、それとなく話してくれたので、先方でも誤解であつた事が解り、間もなく再び會ひませうといふ事になつて、結局目的を達することが出來たのであるが、私はその苦き經驗により、しみ〴〵第一印象の大切なことを味つたのである。

初對面といふからには、互に知らない同志にきまつてゐるが、しかし知らないといふことにも程度がある。全然知らない人、面識はないが、名前や人となりは多少知つてる人、それによつて、初對面の挨拶、座談の呼吸は自然ちがつてくる。

大隈侯とカイゼル

故大隈侯は、外國からお客が見えるといふやうな時には、あらかじめ秘書に命じて、その國の歴史と近狀、日本との國際關係、日本人でその國の世話になつて居る人の名前、反對に、日本に來て居る同國人で有名な人などについて、できるだけ詳しく調べさせ、それを自分の頭の中に入れて置いて、それから對面したものである。